東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

みんなで使おう! 学校図書館 Vol.16：「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」報告集

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 東京学芸大学附属学校運営部 公開日: 2025-03-25 キーワード (Ja): ETYP:教育実践 キーワード (En): 作成者: 東京学芸大学学校図書館運営専門委員会 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.50889/0002000918

令和６年度 文部科学省事業 読書活動推進事業

みんなで使おう！学校図書館

VOL.16

「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」報告集

東京学芸大学　学校図書館運営専門委員会

はじめに

支えてくださった皆様とともに発展してきた、『先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース』は16年目になります。今年は、附属世田谷中学校と附属高校の司書教諭として延べ20年間活躍された桒原智美さんの引退と重なりました。和やかに互いを認めあうワールドカフェの実践を通じて、安心して胸の内を開いてありのままの姿でいられる学校図書館を家庭科教諭の立場から提案されてきました。報告会では、附属高校の岡田司書とともに積み重ねてきた、日常性こそが到達点だと実感できる授業が披露されました。各附属学校の協力で、授業の意図に則してブックトラック上に厳選された本は、大量ではないものの、授業時間内で必ず役立つ道しるべのようです。生徒に聞くと授業が始まるや否や、各グループでまずは奪い合ってお目当ての本をブックトラックから確保するそうです。意欲を喚起する授業導入を自然に実現させる技を垣間見ることができました。

図書の中に宿る心に包まれた家庭のような図書館で育った生徒はそれぞれの場で活躍しています。なかでも、今回の報告会で最先端の研究を紹介された卒業生の小野永貴さんは、中高の図書館で多くを学んだと言っておられました。学校の大黒柱として文化を受け継ぎつつ、絶え間ない新陳代謝を通じた柔軟性が変化への橋渡しになっています。附属世田谷中学校の村上司書によると、「使い方が自由な学校図書館はどんな形の器も満たせる液体のようなもの」だそうです。

一方で、満杯の頭の器に、新しいことをさらに詰め込むのは無理や無駄を招きます。学校図書館を知識の宝庫と捉えるだけでなく、まるでジャーっと器から流すように、頭の中を空にする役割にも着目しましょう。学校や塾では頭に入れることばかりに傾倒しがちですが、頭に入れるために頭を空にする働きが期待されます。もちろん、頭の中をクラウド上に保管したり処理させたりする ICT にもそのような側面はあります。とはいえ、移し替えるだけではなく、図書に没入する擬似体験を通じて、感動でスッキリすることや、自己を客観視して未来を見据え不安感を払拭する経験を子ども達に伝えたいところです。

処理させることに関しても、生成 AI の使用に伴う実生活のリスクを回避するには読解力が必要であり、日常的な読書の意義は増すでしょう。しかし、必要とされる読解力の実体は出力結果への管理・監督責任です。一方、学校図書館が目指すのは思考のブルーカラーです。経験や個々の事実を、抽象化し、概念として再解釈・統合することで頭の占有領域が減少する地道な作用が期待されます。ぎゅうぎゅう詰めの頭の中から人生の $y=ax+b$ を見出してこの関数を以後は活用する頭の整理整頓を支援しましょう。空いた部分に新たに注ぎ込むだけだと合理化・効率化ですが、底から泉のように湧き出て満たされていく知性は、日常的に学校図書館を授業に役立てることで育まれます。そのための工夫のヒントがデータベースには満載です。図書や授業者を含めたあらゆる心を、時間や空間を超えて液体のように変幻自在に浸透しつなげる家庭的・創造的な学校図書館づくりに、この事業が役立つことを期待します。

令和7年2月

東京学芸大学教授

前田　稔

目　次

はじめに……1
目次　……2

【令和６年度の研究】

１．本事業の目的……4
２．実施内容……4
（１）学校図書館を活用した授業実践　……4
（２）学校図書館の整備・活用に役立つ司書研修の企画・実施　……5
（３）『先生のための授業に役立つ学校図書館データベース』リニューアル ……5
３．事業成果の評価の方法　……5
４．調査研究の成果と課題　……6
（１）学校図書館を活用した授業実践　……6
①東京学芸大学附属世田谷小学校　……6
②東京学芸大学附属竹早中学校　……9
③東京学芸大学附属高等学校　……12
■事業委員による指導・助言　……15
■児童・生徒、教員を対象としたアンケートの実施・集計・分析……18
（２）学校図書館の整備・活用に役立つ司書研修の企画・実施……20
（３）『先生のための授業に役立つ学校図書館データベース』での発信……23
大学附属図書館との連携……26
鼎談：「激動の時代の学校図書館を考える：
情報教育や探究型学習、学校図書館活用 DB を通じて」……27

【資　料】

■附属学校図書館データ一覧……30
■附属間相互貸借データ一覧　……41
■活動の記録　～会議等～……42
■日本教育大学協会学校図書館部門活動報告　……43
おわりに　……44
学校図書館運営専門委員会委員名簿　……45
事業委員会・研究協力者一覧……46

【令和６年度の研究】

１．本事業の目的

東京学芸大学では、附属学校運営参事、附属学校課長、各附属学校の司書教諭、司書、そして大学の学術情報課長、学術情報課学術企画係長を委員として、学校図書館運営専門委員会が構成されている。本委員会では、本学の全附属学校園の読書環境づくりと図書館活動について組織的に取り組むとともに、大学図書館や大学の研究事業との連携・協力も行ってきた。文部科学省委託事業に関しても、同様に本委員会で協力して取り組み、本学教授及び他大学教授・公立図書館関係者で構成する事業委員会による指導・助言を受けながら、実践・調査・研究を進めてきた。また、大学図書館とも、月に4回巡回している附属学校園への連絡便を利用した相互貸借など、協力体制を構築している（p.26 参照）。

附属幼稚園及び附属特別支援学校を除き、非常勤ながら専任の学校司書が常駐する附属学校では、児童・生徒の読書環境が整えられている。機能する学校図書館が、「社会に開かれた教育課程」を打ち出した新しい学習指導要領のもと、どのような学習支援を行うことができるのか、率先して発信していく役割が求められている。学習指導要領に沿いながら、教科横断的、探究的な深い学びを志向する教員も多い。学校図書館の機能を計画的・効果的に利活用した授業実践の積極的な発信も求められている

平成 21 年度から、文部科学省事業の一環として『先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース』の運営を行ってきたが、教員養成系大学の附属学校からの発信は、現役の教員だけでなく、教員をめざす学生にとっても有益な情報源となっている。GIGA スクール構想のもと、今後ますます情報活用能力の育成が重要となってくる。それに応えられる学校図書館の環境整備と支援の在り方を検討するとともに、学校司書のスキルアップをめざす。

２．実施内容

（1）学校図書館を活用した授業実践

学校図書館を活用した今日的な課題（SDGs、知的財産権、探究等）の授業案とブックリスト等の提供。 小・中・中高一貫・高校・特別支援学校に於いて、実際に授業を行った。その際、図書・雑誌・新聞・電子書籍・有料データベース・インターネットサイトなど、できるだけ多様なメディアが選べる場として図書館を活用した。事例化するにあたり、指導案・ワークシート等に加えて、授業との連携を主軸としたブックリスト等（含む　デジタルパスファインダー）の提供を目指した。（各校の実践は p.25 を参照）

12月14日に開催した「令和6年度文科省事業報告会～みんなで使おう！学校図書館VOL.16」では、以下3校の授業実践報告が行われた。

① 附属世田谷小学校

「探究活動を支える汎用的スキル育成を行う学校図書館（メディアルーム）」

② 附属竹早中学校

「対話と協働を生む図書館連携教育－インタラクティブ（双方向）なやりとりで育む図書館活用の学び－」

③ 附属高等学校

「『金融教育』教科横断 家庭科基礎＋社会＋学校図書館　有効な学びへの図書館活用」

（2） 学校図書館の整備･活用に役立つ司書研修の企画･実施

夏の研修「みんなで学ぼう！学校司書講座 2024」を 7 月と 9 月にそれぞれ 1 日ずつ実施した。

７月の研修「BookReach を体験しよう！」は附属世田谷中学校の図書館を会場に対面でおこなわれ、BookReach の開発をしている南山大学の浅石卓真先生から説明を聞いた後、小学校、中学校、中等一貫校の校種別グループに別れ、実際に BookReach を操作しながら、単元ごとのブックリスト制作などをおこなった。9 月の研修「『探究』を学びの中心に置く軽井沢風越学園の実践」はオンラインで開催し、司書教諭である大作光子先生、国語科教諭の澤田英輔先生に「読書と探究」をテーマにお話を伺った。いずれの研修も実施後、参加者にはアンケートへの記入を依頼した。

（３）「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」リニューアル

昨年度から継続していた Web サイトのリニューアルが 4 月末に完了し、データベースの 5 月のトピックスにおいて広報した。リニューアル後は、長らく閲覧者から改善が望まれていたスマートフォンでの表示が変わり、PC と同じ画面を見ることが可能となった。今後さらなる利用者の増加が期待される。また今年度は、東京学芸大学教育者研修推進本部が運営するサイト「I Dig Edu」(教育支援者等を含む教育者個人の主体的な学びを支援するプラットフォーム)に、昨年度事業報告会で実践報告をおこなった附属国際中等教育学校の授業動画が掲載された。これにあわせてリニューアル時に「I Dig Edu」のカラムを新たに加えている。

３．事業成果の評価の方法

（１）学校図書館を活用した授業実践

今年度授業実践をおこなった 3 校は、12 月 14 日に開催した「令和６年度文科省事業報告会～みんなで使おう！学校図書館 VOL.16」で授業実践報告を行ない、本事業委員の先生方から指導・助言・講評をいただいた。 また今年度の事業テーマである「読書推進」については附属学校の教員および児童（小学 4 年生以上）・生徒を対象に「2024 文科省学校図書館アンケート」を実施した。これにより教員、および児童・生徒の図書館や読書に対する現状の意識を把握することができた。次年度はこのアンケート結果をふまえ、各校で授業に活用される資料の購入促進をはかりたい。

（２）学校図書館の整備・活用に役立つ司書研修の企画・実施

読書活動のモデル構築に向けた取組みの実施として、司書教諭、学校司書等への研修を実施し、実施後に参加者にはアンケートの記入を依頼した。自由記述欄を設けたことにより研修の有効性について分析し、それをもとに 12 月 14 日の文科省事業報告会で、司書部会より報告をおこなっている。

（３）「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」リニューアル

リニューアル後のサイトへのアクセス数の推移や、授業実践数、各コンテンツの記事数などを集計してまとめることができた。ただ、それぞれのコンテンツへのアクセス解析は、システムの制限などの関係から実施を見送った。一方コロナ禍以降、オンラインで開催した司書研修や講座、事業報告会の動画視聴が可能となり（期限付きの物あり）、さらに今年度は「I Dig Edu」ともつながったことから、従来の学校図書館関係者に加え、教育関係者にも活用されるサイトへと更なる進化を遂げていくことを期待している。

４．調査研究の成果と課題

（１）学校図書館を活用した授業実践

「探究活動を支える汎用的スキル育成を行う学校図書館（メディアルーム）」

東京学芸大学附属世田谷小学校　　河野 広和

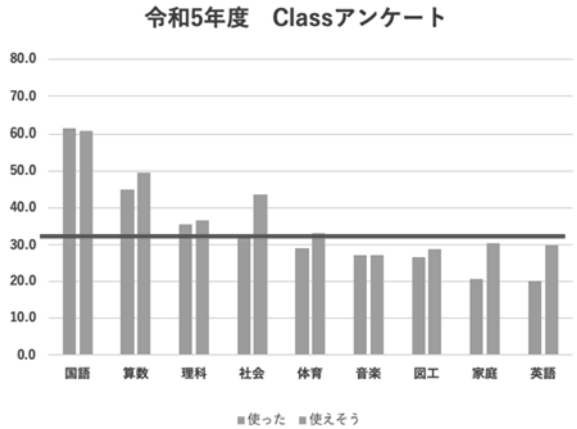
先行き不透明で不安定な社会に対応するために探究的な学習の充実が求められている。今になってというわけではなく「ゆとり」「生きる力」として 30 年前には教育現場に実装しようとしてきた。その間に教育における情報活用は、教材ビデオなどのマルチメディアの活用からコンピュータの導入、2019 年の GIGA スクール構想による一人一台の端末と変遷してきた。本校では、ICT 普及の黎明期(2013 年)に試験的に iPad を導入した。2017 年には文部科学省の教育の情報化推進事業に参加し、情報活用能力を現行の学習指導要領と同じく三観点（知識・技能、思考・表現・判断、主体的に学びに向かう力）で捉え直し、カリキュラムを作成した。例えば、子どもが学級園で野菜を栽培して育て、クラスのみんなでパーティーをしたいというような活動を行うとする。これは、生活科で生き物を扱う内容にも当たるし、特別活動にも当たる。抽象度を上げると、目的を達成するための一連の手続きとも捉えられ汎用的なプログラミング的思考と言える。教科で学ぶこと、学校生活や特別活動で学ぶことなどはそれ自体の内容や価値のみならず汎用的なスキルを含むものがほとんどである。社会科での資料の比較や多面的な思考、理科での実験仮説や検証方法立案なども同様であり、教科をよりよく理解するだけでなく、それを他文脈でも活かせるような情報活用能力として計画的に育むことを目的とした。この汎用的なスキルの育成のためのカリキュラムはその後も学校に残り続けたが、実効性は十分でなく絵に描いた餅となってしまった。形骸化していた。このような事例は、本校以外でも起こり得る事態であり、少なくないと感じている。担当者だけが取り組んでいる、トップダウンで降りてきたものの意義も具体もよくわからない、理想はわかるけど負荷が膨大で取り組めないというようなものである。読んでいる方も多かれ少なかれ似た様な事例に覚えはないだろうか。

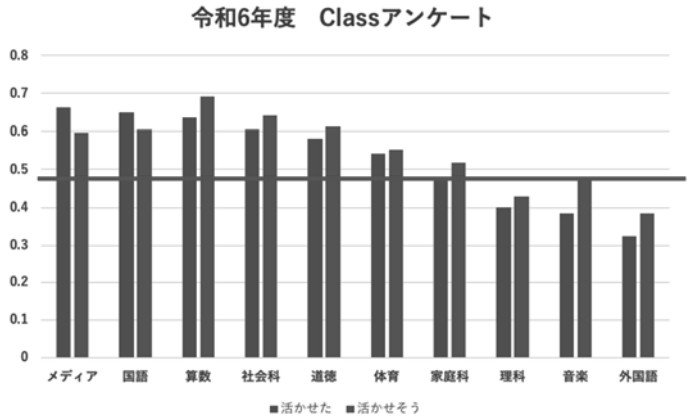
本校では、令和元年度から研究開発学校として教育課程を開発することとなった。詳細は文部科学省からダウンロードできる報告書に載っている。個人が主体となった探究的な学びのデザインを行う Laboratory という時間を設けた。Laboratory では、自由に学ぶことができる。学びの目的も手段も方法も子どもが選択して良い設計である。自由に選択できるとはいえ、その前提となる知識や技能に教科学習（生活経験の総体に含まれる）があり、そこで学びを活かすことを図った。この教科学習の時間は Class という名称にし基本的に教科担任制とした。学んだ資質・能力や見方・考え方を次の学びや人生において自在に活かせるように図ることは現行学習指導要領総則にも明記されている。また、上述したように何十年も前から重要視されてきた。本校の新しい教育課程によって一層その関係は明確になった。教科担任制で教科指導の専門性は向上したが、Laboratory においてそれらがいかに発揮されるかも重要である。教科の垣根を越えて探究に用いられる汎用的なスキルの育成が課題となった。

前述の情報活用能力育成のカリキュラムをそれぞれが実施すると取り決めても実効性は薄いことは経験済みである。轍を踏まないようにするために、各学年学級の週の時間割にメディアの時間として 1 コマを割き Class 担当と学校司書が授業を担うこととした。このメディアの時間はこれまでの教育課程でも存在はしていた（詳しくは後頁の金澤の章を参照）が、その目的に読書活動とともに情報活用能力の育成を置いた。先に全ての汎用的スキルの育成計画が具体としてあるわけでなく、例を示しながら各自の工夫を紹介し合いボトムアップで作っていくことにした。来年度は、今年度の実施した汎用的スキル育成の授業をモデルとしながら改善を加えていく。できるだけ形骸化させないようにメンテナンスも必要である。

メディアルームは各教科や Laboratory において資料を探す場である。学校司書は、子どもの学びの様子を間近で見て理解している。メディアルームと学校司書が各教科、各教科担任、各 Laboratory の結節点となり、汎用的スキルの指導に臨んだ。

下のグラフは、教科学習が Laboratory など他の場面で活かせたか、活かせそうか子どもにアンケートを取ったのものである（12/14 報告会には間に合わなかった）。各教科での指導法の変化なども考えられるが、汎用的スキルの育成を全 Class 担当で行うことにより、活用したことに対する自覚が生じたと考える。昨年度にはなかったメディアの項目も入れてアンケートをしているが、肯定的回答の割合としては最も高かった。アンケートには自由記述欄を設け具体的な内容も聞いた。下表に載せる。





教科で学ぶ汎用的スキルの特徴が表れている。特筆すべきは、メディアにある価値観の醸成に関することである。これはスキルではないが、読書を通じた人格の形成を自覚した子がいたと考えられる。価値観は探究において方向性を決定したり、意欲につながったりする部分である。読書を通じた自己の在り方について考える時間を来年度の計画に入れることを検討する。

教科	具体的な内容
メディア	調査スキル、引用、著作権、批判的態度、プレゼン、価値観の醸成
国語	表現（活動）、場面に応じたコミュニケーション
算数	計算、グラフや表、仮説を立てる、類推、一般化、対話
社会	生活文脈、資料活用、多面的・多角的思考、過去から学ぶ、批判的思考、問いの生成
道徳	Home集団、判断保留、感情抑制、価値の多様性
体育	Home集団での活動、ルール、協力、作戦、データ分析・振り返り
家庭科	Home生活、生活文脈、仮説・道筋をつける、目的と手段、生活をより良く
理科	内容＝テーマ、対話、問題解決過程、観察、比較と分析、論理的表現
音楽	Home集団での活動、表現力、協力
外国語	英語の資料、コミュニケーション、日本語と英語の構成や学び方の違い

ここまで汎用的スキルの育成のための授業に触れていないが、紙面の許す限り一部を紹介する。

題材名	内容
データ・リテラシー	「窓をひらけばわかるデータのホント」（田中司朗・かもがわ出版）　情報のインパクトを批判的に捉える。誠実なデータの取り扱いを考える。
ダメプレゼン	ありがちなわかりづらいプレゼンテーションから逆にわかりやすさ、つたわりやすさを考える。文字量、色使い、専門用語の使用、著作権、データの並べ方、一般論の羅列など
検索の検索	検索サイトを検索し提供の目的と結果の偏りに気付く。検索演算子の使い方“～”-キーワード filetype:pdf ドメインについて go.jp や ac.jp
ラボ（探究）×クラス（教科）	それぞれのカードを引いて、意図していない組み合わせから問いをつくってみる。人工セレンディピティの発生を狙う。
KJ 法 川喜田二郎「発想法」	付せんは教科でもよく使う、分類も行うが、もともと発想法であることを学ぶ。例：学校の良いところ→分類→行動
SDGs	食卓から地球温暖化、資源、国際関係、自国の文化、経済、消費者として関わることを考える。「自分には関係ない」は通じない現代を知る。

司書から見たメディアの時間

東京学芸大学附属世田谷小学校　学校司書 金澤 磨樹子

赴任当時から本校は、メディアルームを優先的に利用できるメディアの時間が、各クラス週 1 時間割り当てられていた。この時間は、よく利用されており、子どもたちの読書が習慣づけられていると感じていた。先生方が子どもたちの読書を大切に考え、この時間を大事にしているのだと感じていた。一方授業で使う資料の依頼がとても少なかった。そこで、当時の司書教諭に相談し「情報活用能力育成の系統表」を作成してもらった。この表を基に校内研修で各学年、教科のどの単元で関われるかを考える時間なども持ったが定着しなかった。そんな中でも司書は、メディアの時間に図鑑・百科事典・学習年鑑などの利用指導や分類について子どもたちに説明していた。しかし、メディアの時間で行ったものが、授業で使われているという手ごたえを得られず、メディアの時間だけで完結してしまっているのではないか、子どもたちに身についていないのではないかと感じ続けていた。

研究開発校となり「Laboratory」の時間がはじまり、「やっとチャンスがきたかも」と思った。Laboratory の様々な研究室が設けられ、これまでの学習では扱わなかった新たな分野での蔵書を購入することができた。また、探究のために必要な技（参考図書の利用の仕方・参考文献の書き方・著作権等）について「Laboratory で使えるね」という文脈の中で伝えることができるようになり、子どもたちも意識して活用するようになっている。

しかし、この新たなシステムが始まった当初、3 年生以上は Home の時間に隔週 30 分で本の貸出返却のみを行うことになった。途端に読書から離れてしまう子どもが増えたと感じた。毎週定期的にメディアの時間を設けていたことは、子どもたちの読書の習慣化に大いに役立っていたのだと、皮肉にも再確認させられた。その後、先生方も子どもたちが読書から離れてしまうと考え、全クラスが週 1 時間メディアの時間を取れるように戻した。

今年度、メディアの時間は担当の先生が行う授業時間だということを明確にし、読書と情報活用能力を育成するための時間と校内で確認した。そのため、司書は、メディアの時間を担当する先生とどのように進めていくかを毎回相談し実践している。また、司書教諭が校内研などの会議で図書館の活用について話題にしているので、学校内でメディアの時間について考えていこうという気運になっている。

今年度メディアの時間を担当している宮田先生と長坂先生は次のように話している。

宮田（4・5 年社会科担当）：一学期に「たくさんのふしぎ」を一冊読んだ上で、そのテーマを他の本に繋いで紹介する活動を行った。二学期は 10 冊の本を十進分類にわけるゲームを行った。その際、一冊の本を巡って、「この本は２類なんじゃないか」「いやいや、違う類なんじゃないか」と議論をしていくことで、ある事象に対してのイメージがこのゲームを通して広がった感覚があった。さらに今取り組んでいるパスファインダーづくりでは、人にとってわかりやすい情報を集約するという目的はあるが、自分に使えるメディアが本だけではなくて、インターネットの情報や映像情報などいろんなメディアがあるということを体験している。

長坂（5・6 年体育科担当）：読書活動を通して子どもたちと関わることができるようになり、体育の学習だけでは見えてこない子どもの側面を見ることができてとても良いと思っている。グラフや資料を正確に読み取ろうということを行った。体育でもプレーを観察し記録してデータを読み取ることをしていたし、他の教科でも活用できる力だと思う。本の良さをアピールするということを意識づけるために自分のお気に入りの本を宣伝する活動を行った。子どもたちの読書活動が広がっていけば良いと思っている。

対話と協働を生む図書館連携教育
～インタラクティブ（双方向）なやりとりで育む図書館活用の学び～

東京学芸大学附属竹早中学校
司書教諭　荻野 聡
学校司書　中村 誠子

１．はじめに

本校は、東京都文京区小石川にある東京学芸大学の附属校である。生徒数は１学級 35 名で、4 クラス×3 学年の総数 430 名を定員としている。竹早地区では、昭和 61 年から幼・小・中の連携教育に取り組んでおり、幼稚園から中学校まで、希望すれば全入の体制をとっている。また、幼→小→中と、校種が進むごとに内部生とほぼ同数になる人数の外部生が入試を経て入学してくる。そのため、竹早園舎に通う子どもはあわせて 11 ヵ年（幼２年、小６年、中３年）を竹早地区で過ごすことになる。また、同じ東京学芸大学附属校の大泉小学校からも 10～20 名程度の入学者を受け入れている。そのため、生徒の半数以上は既に気心の知れた友達がいる状況で入学をしてくることになる。

竹早地区が幼・小・中の連携教育を実践しているのは前述のとおりであるが、その中で一貫して大事にしている教育観が「主体性」である。竹早地区では「主体性」を「子どもがよりよく生きるために、自分（あるいは集団）の願いに基づき、自らの意思・判断で行動しようとする姿勢や態度」と定義している。そして現在では、東京学芸大学や各企業、教育委員会と連携して「みんなで作ろう。未来の学校プロジェクト」を推進しており、研究テーマとして「未来を切り拓く子どもの主体性が活きる学び」を掲げている。従来から取り組んできた「主体性」の研究や蓄積してきた実践の成果に、「未来の学校」の要素を加味することで、これからの社会をしなやかに生きる子どもの主体性を育むことを目指し、今年度は２年次の研究に取り組んでいる。

これまでの竹早地区の実践研究において各教科、各校種での教育実践を重ねる中で、子どもたちが主体的に学ぶためには、学びをいかにデザインするかという教師側の視点と、子どもたちにどのような環境を用意するかという学習者側の視点の双方が組み合わさることの重要性が確かめられた。

そして、各方面で言われているように、学校図書館は単に読書のための場ではなく、探究的な学びの場、学びの成果を蓄積・共有する場、多様な生徒が交流し協働するための場としての機能を有している。いわば「学びのプラットフォーム」として学校図書館が機能することで、学びが活性化し、複層的に作用することが期待される。本校では近年、各教科実践の中で探究型の学習に多く取り組むようになってきている。その際、図書館を活用したり、図書館司書と連携して授業をデザインしたりすることで新たな学習方法を模索しているのが現状である。その中で国語科では、図書館を活用し、読書教育を基盤に据えることで、生徒たちが双方向的なやりとりをしながら学びを深めやすいと考えた。本稿では、今年度国語科で行った双方向的なやりとりに着目した図書館連携の実践を２つ取り上げて紹介したい。

2. 図書館連携授業の実践

① 国語個人研究プロジェクト（ココプロ）

「ココプロ」という名称は「国語／個人研究／プロジェクト」から取った造語である。半年～一年の期間を通じて、生徒一人ひとりが自分で設定したテーマについて調査・研究を進め、最終的に論文形式のレポートを提出することを目標とする。設定する研究テーマは、「国語に関係するもの」であれば何でも良いことにしている。間口を広くすることで、生徒自身の興味・関心から研究をスタートさせやすくするためである。またココプロでは、書籍や論文の検索や引用の仕方についての指導など、情報リテラシーにつ

いても指導する。その際、学校司書と連携して、テーマに関連する書籍を収集したり、必要に応じてレファレンスが出来るようにしたり環境を整えたりすることが、学習効果を高めるためには欠かせない。
生徒たちの設定したテーマの一例を挙げると、「ChatGPT が生成する文章の特徴」「恐竜の学名の発音が言語で異なる理由」「アイヌ神謡における生物と人間」「世界の創世神話の比較」といったものがあった。

ココプロは生徒が自分に合ったペースで、自分の興味関心に沿って進められる学習である。また、期間を長く設定していることから、生徒が家庭での学習や自習課題の一つとして取り組むこともしやすい。GIGA 端末（本校では iPad）が一人一台手元にあることで、調査探究と執筆にすぐに取り掛かることができるという良さがある。生徒はそれぞれが自分のための研究に浸り、楽しみながらココプロの学習を展開する。多田孝志（2011）は「浮遊型思索」の重要性を指摘しているが、ココプロでの生徒の研究に没入する姿や、友達と研究に関わる対話を楽しむ姿は、浮遊型思索を享受する姿と言えよう。しかし、生徒に委ねた自由度の高い学習活動だからこそ、基盤を固めないと、質の高まらない調べ学習や単なる息抜きの時間に堕してしまう危険性もある。本単元では、生徒に探究学習を意識させるためにも、知的好奇心を維持させるためにも、図書館との連携は有効に機能していたと考えている。

配布資料の一例
(左)パスファインダー
(右)個別テーマに沿った資料リスト

② ビブリオバトル

「知的書評合戦」とも言われるビブリオバトルを、国語の授業に取り入れた実践である。一般社団法人ビブリオバトル協会の公式ルールでは、次の 4 点が示されている。「1.発表参加者が読んで面白いと思った本を持って集まる．2. 順番に 1 人 5 分間で本を紹介する．3.それぞれの発表の後に，参加者全員でその発表に関するディスカッションを 2〜3 分間行う．4.全ての発表が終了した後に、『どの本が一番読みたくなったか？』を基準とした投票を参加者全員が 1 人 1 票で行い、最多票を集めた本をチャンプ本とする」。

今回は、国語の授業で、図書館と連携してビブリオバトルの実践に取り組んだ。

また、国語のビブリオバトルから派生して、本を美術作品に置き換えて紹介しあう「美ジュリオバトル」が美術の授業で展開された。「ビブリオバトル」の根底にあるのは、自分が得た感動を他者と分け合う、という姿勢だと言える。直に手に取ることのできる本の方がより適してはいるが、GIGA 端末を使って、美術作品から得た感動を共有し合う活動に発展できたのは、図書館連携が波及していった一つの実例となった。

3. 課題と今後の展望

以上、ここまで論じてきたように竹早中学校では、図書館と連携した授業のあり方を模索している。国語科に限らず、多くの教科や総合学習との連携もあるが、まだまだ十分とは言い難いのが現状である。図書館と連携するうえで一つ課題になっているのは、本校では小学校と中学校とで図書館を共用しているという点が挙げられる。そのため、小学校が授業で使用している間は中学校が使用できず、中学校が使用している間は小学校が使用できない。原則午前中は小学校が、午後は中学校が使用する形をとっているが、そうなると全クラスの授業をそろって確保するのが難しくなってしまっている。そうなると必然、授業で図書館を活用する頻度は減ってしまい、せっかくの図書館を活用する機会を十分に活用できているとは言い難い。

今後の展望として、図書館の書棚の配置換えをし、小・中を交えた二学級が並行して授業を行えるように、ツイン学習スペースへと改修していくことを企図している。まずは小学校と中学校それぞれが、互いに気兼ねする必要なく授業を展開できることを目指し、ゆくゆくは小・中で校種をまたいだ図書館連携の合同授業を展開することも構想している。

図書館が日常的に学校の学びの中に位置づき、生徒が読書を楽しみ、学びを共有するような空間となることを目指し、今後も研究と実践を重ねていきたいと考えている。

※多田孝志「共創型対話における浮遊型思索と響感・推察力の意義」（『目白大学人文学研究　第 7 号』2011 年）

本校における「18 歳成人における金融教育」の学校図書館実施と図書館の担うものについて

東京学芸大学附属高等学校　家庭科　司書教諭　桒原智美
東京学芸大学附属高等学校　司書　岡田和美
東京学芸大学　図書館情報学　教授　前田稔

はじめに

18 歳成年年齢引き下げの時期に行った金融教育についての本校（東京学芸大学附属高等学校）の学校図書館での家庭科授業を中心に、学校図書館と各教科の繋がりなども含めて、2024 年 12 月 14 日に全国に向けて 30 分の報告をさせていただいた。本校は家庭科の中の家庭基礎という 2 単位の科目を、高校 2 年生に週 2 時間実施している。また、本校では多くの教科が何らかの形で学校図書館を授業に活用している。今年度 SSH の指定校となっているので、探究学習の個人研究やグループでの研究などはもちろんだが、今回、家庭科と横断的に授業をしていた公共や古典をはじめ、保健体育の調べ物や地理、過去英語の教員がゲストを呼んでの講演会を図書館で開催したことなどもあった。今年度探究学習で生徒からリクエストの出た本は、図書館で全て購入している。

今回は家庭科の消費生活の中で自らの考えを深め、今後の生活を考える手立てとしての「金融教育」を取り上げた。産業構造や社会システムが急激に変化する現代において、実社会でも求められる能力が変わり続けている。新たなことを学び、挑戦する意欲を育てる授業を試みているところである。2022年4月文部科学省の学習指導要領高等学校家庭科に金融教育について記載され，投資の内容が加わった。2024年4月にはJ-FLEC金融経済教育推進機構も設立され、ますます関心の高まっているところである。金融についても現実を知ることや自分に可能な対応と最善の策を考えていくことは、人生に必要なリテラシーの一つと考える。関連事項として2022年4月より成年年齢引き下げとなり、金融リテラシーを効果的に身につけることは喫緊の課題である。しかし高等学校家庭科の授業数は少ない。そこで学校図書館を共通の情報の「場」として、効果的に他教科と横断をしていく方法を探り、情報ステーションとして学校図書館を多機能な「場」として活用し、よりマクロに考える3学期の公共の授業へ繋げている。

授業の流れ

4 月早々に金融教育「投資とは？」という直球のテーマで高校 2 年生に図書館授業を行った。画像や資料集など、身近な本からスタートする人が多くいた。4 月の授業直前に生徒に聞いたものであるが、投資をしたことの「ある」生徒は 6.7%で 223 名中 15 名。あると答えた生徒に「投資とは？」どのようなものかたずねると・自分のお金を企業などにかけること（11 名）・時間をお金に変える準備をすること（1 名）・将来のリターンを期待して自分の資金を他人に投じる（1 名）と、答えていた。ほとんどの人が「ない」93.3%であった。その理由は・お金を失う気がするから怖い・まだ早いと思っていた・高校生でもできるのだと初めて知った（ポンタや PayPay などのポイント投資などで身近に感じたようであった。）・やりたいと思っているが、高校生にあった投資の仕方が分からず何もできていない…・いつか貯めたお小遣いを使って株を買ったりしたい、など。また、「投資」には全く興味のない人もいた。この授業については、2024.5.11.日本経済新聞に掲載されている。6 月には投資専門家の卒業生に、金融庁作成の高校生のための教材「金融教育パワーポイント」を軸とした授業を全８クラスに各２時間実施してもらっている。10 月には生徒が授業案を作る授業を実施。こちらの授業は 2025 年度文部科学省 HP の金融教育実践例に掲載予定である。本校は 1to1 で、一人 1 台のパソコンを 3 年間リースで使っている。PC には慣れているので官庁、銀行などの協会、その他良い資料はネット上にも多くあり、PC で調べる生徒もいた。

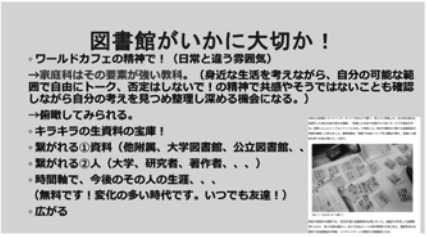
授業詳細は本校紀要 62 号に掲載。11 月の図書館での授業は、再度「投資とは？」というテーマで話し合いをしてもらったが、この授業では本が威力を発揮した。司書にパスファインダーやブックリスト、ブックトラックを準備してもらい、班の中で、まず個人の意見を 30 秒述べてから班で付箋を使って時間短縮しながらまとめる、そして 2 分発表、という流れであった。授業ではワールドカフェの精神で！日常と違う雰囲気で、否定はしないで、共感度を意識してもらい進行している。家庭科はワールドカフェ的要素が強い教科で、身近な生活を考えながら自分の可能な範囲で自由にトーク、共感やそうではないことも確認しながら自分の考えを見つめ整理し深める機会になると考えた。

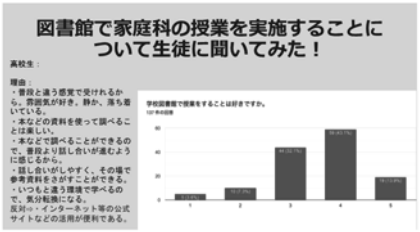
授業を終えて感じたこと

図書館の特徴はキラキラの生の資料の宝庫であり「繋がれる」ことである。繋がれるの一つ目は資料である。（他附属、大学図書館、公立図書館、、、）今回は、学芸大の他附属からたくさん借りてくれたと司書から聞いている。繋がれるの二つ目は人である。（大学、研究者、著作者、、、）今回も大学の前田先生はじめ 10 月の授業中に使った本の著者にも 11 月の図書館で行った公開研究授業においでいただいた。図書館は時間軸で、手を伸ばしさえすれば今後のその人の生涯につながり活用できる。（無料で！変化の多い時代に、いつでも友達である。）この授業だけでなく、広がることができると考える。

その他

本校では家庭科の夏の宿題の調理レポートを図書館に日替わりで名前は明かさず全員分を貼り出してもらっている。ここ何年か実施しているので、1 年生の気持ちの入り方が違ってきて、2 年生になった時に、すでに内容をわかっている。また、2 年生にとっても励みになるようで、「今年はいつからですか？もうそろそろですか？」と 9 月に聞かれ生徒のワクワク感が伝わってきた。やはり図書館は日常と違うワクワク感があるのだなあ、と感じる。





生徒に学校図書館で授業をすることについて聞いてみた。9 月に実施。回答は 137 名。5 件法で「とても好き」「好き」の 5，4 が合計 57.0%と好意的に受け止められているようである。理由は・普段と違う感覚で受けることができるから。雰囲気が好き。などがある一方で反対意見もあり⇨・インターネット等の公式サイトなどの活用のほうが便利である、などもあった。

「情報センターとしての学校図書館の多機能な場」について

図書館が授業展開に寄与する特長をどのようにとらえるかだが、本という情報だけでなく、PC も使える。PC だけならどこでも使えるが、その両方を選択できる。また、雰囲気などを含めての「場」としての機能を考えると、話しやすい、意見が言いやすい、いつもより少し自由、などがある。そのことが、より深く考えたり、身近に考えたり、自分ごととして考えるヒントや機会をくれると思う。次の学習に続くのだと考える。高校だと図書館が多面的に深めることを可能、補助してくれる場面がそれぞれの教科の中にどこかあり、そこを自分の授業の中で見極めていくことにより、教師自身も助けられ、授業が発展していくと思われる。　　（文責：東京学芸大学附属高等学校　家庭科　司書教諭　桒原智美）

東京学芸大学附属高等学校図書館の教育実践紹介

東京学芸大学附属高等学校　学校司書　岡田　和美

１．はじめに

本校の学校図書館は、授業との協働を目指し、生徒の学習支援、教員への研究サポートを中心に行っている。今年度より SSH 事業のⅢ期目指定を受けており,「生徒エージェンシーを育むための次世代理数カリキュラムの開発と普及」という研究開発課題を掲げ，新たな取り組みを進めている。

以下に探求型学習の基礎となる授業を中心に各教科での日常的な図書館活用の様子の一部を報告する。

２．図書館授業支援

第 23 回公開教育研究大会 図書館参加・連携授業

◎今年度は「教科・科目の融合・連携」に焦点を当てての大会となった。研究大会における図書館授業実践を以下に記載する。

①　家庭科　「18 歳成人における金融教育」

金融教育を「自分ごと」とするため、授業見学で司書が意図的に生徒から収集したキーワードをパスファインダーに提示し、館内展示書籍のブックリストと一緒に Google の Classroom に入れ込み 1 to 1（1 人 1 台 PC）の活用をはかり図書館授業を行った。

②　社会科（公民）金融教育　「ディベート　金利は上げるべきか否か」

教員と事前に資料の打ち合わせを行い、あえて紙媒体の新聞を活用し、金融への横の視点を育てる手立てとした。図書館授業では、金利・物価・日銀などマクロ的なキーワードに司書が付箋を貼り多様な資料の活用を行なった。

③　芸術科(美術 II，工芸 II)「源氏物語の世界の「美意識」に触れよう」

4 つの視点でのリサーチ（天然顔料・絵巻の構造・調度品・装束）を行う上での生徒の理解が深まる的確な資料の収集・提供を行った。

④　芸術科（音楽 II)「源氏物語の世界を音楽から眺めてみよう」

音楽と古典という今までにない授業支援の依頼で大変苦労した。音という現代に残っていない資料を論文やデジタル資料にあたり、昔の音楽を体感できる資料として雅楽「越天楽今様」・源氏物語「紅葉賀」から「青海波」にたどり着いた。

３．教育実習生における図書館活用授業

◎本校図書館では東京学芸大学の教育実習生に向けて、6 月に司書による図書館オリエンテーションを実施し、その成果として毎年実習生の図書館授業が行われている。

①　家庭科　「持続可能な衣生活　パスファインダーの活用」

パスファインダーを利用する図書館情報学との横断的な授業となった。各班のテーマごとにパスファインダーを実習生自らが作成し「消費と衣生活」として資料活用を促し、各テーマを深めることとした。

４．図書館の展望

本校のテーマである「教科横断・教科融合・連携」と連動する図書館運営を目標とする。教科の横断はもともと多様な資料を有する図書館の得意とする分野である。教科が横断することにより、資料支援や学びの場としての学校図書館と教科との連携が進むことを今後の展望とする。

■事業委員による指導・助言

附属世田谷小学校の授業実践　講評

帝京大学教育学部教授　鎌田 和宏

附属世田谷小学校の実践研究から何を学ぶかということについて、これは一般にさまざまな学校の研究開発から学ぶことと同様だと思われるが、単純に一部を取り出して学ぶというわけにはいかない。特に附属世田谷小学校は文部科学省の研究開発学校として指定されており、学習指導要領の枠外のことにも取り組んでいる。これが今回の独自のカリキュラムの説明につながっている。

附属世田谷小学校のユニークなカリキュラムは、Laboratory に集約される探究的な学習を中核としたもので、従来の学校カリキュラムの見直しと新たなカリキュラムの創造にある。ただその Laboratory を中心に考えるにしても、学習の基盤となる資質能力、これは学習指導要領で提唱されているものであり、それを育成する点では共通していると考えられる。そして、それらは拡張された「読める・書ける」という力が基盤となっており、学校図書館を活用して育てられるものである。

特に今回の発表資料で目を引いたのは、学校司書の金澤氏のコメントである。金澤氏によると、新しいカリキュラムの開始に伴い、学校図書館に子どもたちが行く時間、つまり「メディアの時間」が 3 年生以上の子どもたちにとって隔週となり、30 分で本の貸出返却というふうにグレードダウンしてしまった。その結果、読書から離れる子どもが増えたと感じたという。毎週定期的なメディアの時間が、子どもたちの読書習慣の形成に役立っていたことが再確認された。学習基盤となる読書経験をきちんと保証しないと、子どもたちは読書から離れ、その力が弱くなってしまう。これを受け、各クラスが再び週 1 時間のメディアの時間を設けるようになった。これこそ学校図書館が子どもたちの学習の基盤を作っている証拠である。

附属世田谷小学校の資料では、平成 28 年度に取り組まれた次世代の教育の情報化推進事業において整理された情報活用能力の表があるが、十分に活用されていない課題が示されていた。このような情報活用能力を整理し一覧することは教師や学校にとって重要だが、表を作ることがゴールではなく、それを実際に活用することが求められる。

附属世田谷小学校のカリキュラムでは、令和 6 年度に開設されたラボが子どもたちを主体的・協働的な探究へと向かわせる支援として、学校図書館が機能することが重要である。学校図書館はこの新しいカリキュラムの基盤を作る役割を果たし、読書活動や情報活用のカリキュラムが確立された。このカリキュラムが Laboratory でどのように活かされているかが示されることで、学校図書館の貢献が明らかになるのではないか。

附属竹早中学校の授業実践　講評

専修大学教授　野口 武悟

竹早中学校での取り組みは学ぶところの多い実践であったが、多くの学校に共通する問題も抱えていた。例えば学校図書館が教室のエリアから遠い。竹早中学校の場合には、小学校の校舎にある学校図書館メディアセンターと共用なので、生徒たちは図書館に来ないという話があったが、そのような学校は少なくない。最上階の隅に学校図書館があり、なかなか生徒が来てくれないという話はよく聞く。それから時間調整の難しさについても話があった。時間割の調整等の関係で本は教室で使えばよいとかインターネットで済ませるケースもある。これらは多くの学校が共通して抱える悩みだろう。では、そのような状況で竹早中学校ではどういう工夫をして学校図書館活用を進めているかという視点で見ると、学ぶところの多い実践報告であった。学校図書館による授業実践の支援のポイントとして、私が注目したところをいくつかまとめた。

1 点目は幼小中の連携である。竹早小学校で 6 年間、図書の時間がしっかりと設けられていて、そこでの基礎が本実践の子供たちの学びを支えている。今回の発表は中学校だったが、その前段階としては小学校で図書館活用力や読書の力、情報活用能力を育てていく。

2 点目は紙の図書資料とデジタルコンテンツとの効果的な組み合わせである。ジャパンナレッジやリンク集なども使ってオープンアクセス可能なデジタルコンテンツへのリンクなども提供していた。これは 3 点目にもつながるが、情報カードの色分けをして、様々な媒体を使って、意図的に働きかけている点も良かった。紙の図書資料だけではなくて、デジタルも含めて学校図書館の情報源として活用していこうという視点は、2 年前の 8 月に文部科学省が発出している事務連絡の中にもある。教科書や資料集などの教材はもちろん書籍、新聞、雑誌、そしてインターネットなどを効果的に組み合わせて活用することが重要であると明確に示されている。GIGA スクールによる 1 人 1 台端末と学校図書館との関係をどう考えていくかという問題に踏み込んで言及している。本実践はそのような観点も生かした取り組みであった。

3 点目は学校図書館の図書資料だけで完結をせずに、地域の公立図書館で 1 冊以上本を借りることにしたことである。高校を卒業した後も地域の図書館などを積極的に使って様々な情報にアクセスをしたり読書を楽しんだりしていってほしい。子どものうちから地域の図書館も使っていく習慣づけは重要である。また、段階的な著作権指導が行われていて、それが学校図書館からの支援という文脈で取り組んでいるのも良い。

そして最後のポイントとしては、ビブリオバトルを発展させて美術科と連携して「美ジュリオバトル」という取り組みを行い、成果を学校図書館の外で展示するなど、学校図書館の活動を外に広げていこうという試みが意図的に行われていたことである。これは学校図書館の距離的な隔たりを補う意味でも有効な試みである。身近なところに図書館をどう届けていくかという視点は重要なポイントである。

次に今後への期待として 3 点を挙げる。1 つは様々な教科での活用をどう広げていくか。美術科との連携をヒントに、他の教科にどう広げていくか。その手がかりはすでにつかめていると思うので、ぜひ他教科にも広げていってほしい。2 つ目は探究の成果物をレポート・論文の形にまとめるという話があったが、ぜひ学習成果物も図書館メディア、図書館資料として次の学年の生徒たちや他の子どもたちも参照できるような形でアーカイブしてほしい。現物で残すのが難しかったら、デジタルにしてデジタルアーカイブをしてタブレット端末で参照できるようにする。すでにそういう試みを行っている中学や高等学校がある。

最後に、学校の外との連携にもつなげたい。例えば作ったポップを地域の書店や図書館に展示をしてもらうところまで意図して発展させることも可能な実践である。

附属高等学校の授業実践　講評

元埼玉県立久喜図書館副館長　東京学芸大学非常勤講師　長谷川 優子

栗原先生の指導案にもあったように学校図書館は情報センターとしての多機能な場である。情報を手に入れる場というのは当然のことだが、図書館が持っている特有の「話しやすい、意見が出しやすい、気持ちを自由にしてくれる場」ということが、より思考や交流を深めていると述べられていた。

公開授業を見たので学校図書館の様子を紹介したい。入口から入ってすぐ、豊かな新書があり、さらにマンガが並べられている横にSSH校としてのハイクラスな学術書が並べられていて、色々なものが共存している場所としての図書館の特徴が現れていた。それと同時に今回の発表のテーマであった金融教育について、新聞や雑誌など多様なものから選び抜かれた資料が置かれ、代表的なものにはコメントが書かれて、多様かつ厳選されているということを感じた。さらに、高校生が小学生向けの授業をするときの参考になる子ども向けの金融教育関係資料が別に取り出して置かれていて、高校生が学びを深めることと小学生向けの授業をつくるという2つの視点で展開されていることが伝わってきた。同時に豊かな所蔵もあるので本来の書棚で様々な観点のものを見ることができる。

家庭科のみならず、他の授業も含めてパスファインダーが活用されており、中でもキーワードの選定が特徴的である。現在の生徒は情報を求めるときにまず検索をかけるので、最初の時点でいかに的確な、自分の思いを表現できる言葉に出会えるかということが重要だが、司書の岡田さんはそのキーワードを生徒が馴染みやすいように、これまでの授業の過程で出てきた言葉をあえて積極的に採用してパスファインダーの中に取り込んでいき、逆に子どもからは出てこなかった重要な単語も含めていき一緒に作り上げていったということである。また司書が寄り添って授業を見続けてきたからこその選書であり、パスファインダーとなっていた。

実際の授業では付箋を使って即席で自由にやり取りをして進められていることが印象的であった。そばにいたある生徒が「投資とは生き方そのものである」と言っていて、その言葉がグループの中で共感の風が吹いたということを感じた。今回の授業に際して金融教育リテラシーマップを把握した後であったので、この言葉がいかにこの授業の賜物であったか、成果であったかということがよくわかった。さらに他のクラスの作ったものや、新聞記事に付箋を貼ったものが図書館に展示されてあり、成果物だけでなくプロセスが他の人にも見られるようになっているというところが印象的であった。

金融教育リテラシーマップの存在についても皆さんにお伝えしたい。学校図書館の「情報活用能力育成系統表」にも似ているように見えるが、これは高校までとなっていて公共図書館とは分断されている。これに対して金融教育リテラシーマップは各ライフステージ上から見ることができる。生徒が小学生向けの指導案を作る際にもこれをもとに生徒が大局的に見る、メタ認知をしているということがよくわかった。このように利用者が主体的に判断につながるものをもっと広げていきたい。例えば公共図書館ではがん教育についてのリテラシー教育に取り組んできた。またビジネス支援教育についても行ってきたが投資についてはあえて外してしまっていた。公共図書館の持っている資源で寄与しうるものもたくさんある。学校図書館、家庭科の教育の中で生徒が自分自身の自立的な判断力を育てているので、その次に各ライフステージ上で実際にどう立ち向かうかというときに公共図書館の果たす役割は大きい。家庭科がもつ「生き方そのものを考えていく」教育を公共図書館として連携し応援していきたい。

■児童・生徒、教員を対象としたアンケートの実施・集計・分析

教員対象

1.　学校図書館を使う頻度

全く利用していない	10 人
年１回程度	7 人
年に数回	40 人
学期に１回程度	14 人
それ以上	74 人

教員アンケートについて
　附属学校教員に協力を呼びかけ、結果 145 名の回答を得た。1.学校図書館を使う頻度と、2.どのように使っているか現状を答えてもらったうえで、3.今後どのような役割を学校図書館に期待しているかを明らかにした。

2.　現在は、どのように使っているか？上位５項目（複数回答可）

児童・生徒用資料の準備（司書への資料提供依頼、ブックリスト作成依頼等）	90 人
教材研究の相談・サポートを得る（司書による資料提供を含む）	85 人
児童・生徒のリサーチのサポート	56 人
個人的な利用（趣味、勤務校での授業以外の研究等）	55 人
授業会場（児童・生徒のリサーチでの利用は除く） ★小学校における“図書の時間”での利用は、教員主導で授業をする場合のみ含む	51 人

3.　今後どのような役割を期待しているか？（複数回答可）

児童・生徒のリサーチへのサポート	90 人
児童・生徒の読書環境の充実	87 人
児童・生徒のリサーチスキル向上へのサポート	78 人
授業づくりや教材研究についての相談受付やサポート	71 人
オンラインデータベースやオンラインデータの提供と利活用のサポート	65 人
児童・生徒の著作権に対する意識向上へのサポート	60 人
児童・生徒にとっての居場所	56 人

4.　考察

　半数以上が、学期に１回よりも多く学校図書館を利用する（1. 学校図書館を使う頻度）と答えたが、アンケートそのものが任意であるため、特に関心と利用頻度の高い層に回答者が偏った可能性がある。児童・生徒への資料の準備と、リサーチへのサポートが利用項目として高いことから、児童・生徒が自主的にリサーチをする、探究的な学びが展開されていることがうかがえる。他方、読書環境の充実を望む声も多く（3.今後どのような役割を期待しているか？）読書センター、情報センター、学習センターとしてバランスの良い学校図書館が求められていることも改めて明らかになった。

児童・生徒対象

　小学生は４年生以上を対象とし、自由記述は１問だけとした（回答は任意）。 中高生は、選んだ回答の説明は自由記述とした。小学生は、725 名の回答、中高生は、1743 名の回答を得た。アンケートは、1.過去に楽しい読書体験を持っているか、2.何かを調べる時に書籍を使っているか、3.インターネットで

的確に情報を得ることができているか、4.学校図書館での授業に意義を感じているのかを問うものとした。

1.本を読むことを楽しいと感じたことはありますか？

	小学生	中高生
ある	93%	93%
ない	7%	7%

小学生、中高生を問わず、読書を楽しいと感じたことがある児童・生徒が９割を超える。読書に対するポジティブなイメージが広く浸透していることがうかがえる。

2.あなたは何かを調べるときに本を使うことがありますか？

	小学生	中高生
よくある	29%	25%
時々ある	32%	36%
たまにある	29%	28%
ない	11%	11%

「（使うことが）ない」という回答が11%に留まることから、大半の児童・生徒には、まだ本の資料的価値が失われていないことがわかる。一方、本以外（恐らく大部分はネットの情報）の利用頻度もかなり高いことがうかがえる。今、私たちは本の資料的価値が維持されるかどうかの瀬戸際にいるのかもしれない。動向を注視していく必要があるだろう。

3.あなたはインターネットから正しい情報を見つけることができていますか？

	小学生	中高生
できている	50%	59%
できていない	4%	3%
わからない	46%	37%

小学生の５割、中高生の６割が「正しい情報を見つけることができている」と回答しているが、自己認識と実態には乖離があるとも感じる。教員の目にはどう見えているのか、実際に正しい情報を見つけることができているのか等、更なる調査の必要性が見えてきた。

4.-1 学校図書館での授業は、あなたにとって役に立つものですか？どのように役に立ちましたか？
（小学生への質問、回答は選択式かつ複数回答可）

本を好きになったり、読みたくなったりした	466 人
本やインターネットを使って知らないことを知ることができた	358 人
本やインターネットで知りたいことを調べることができた	314 人
本やインターネットでの調べ方がよくわかるようになった	295 人
特に役に立っていない	74 人
その他	49 人

回答した小学生の約９割が、何らかの意義を学校図書館での授業に感じていることがうかがえる。また、読書だけではなくリサーチにも学校図書館は活用されていることが読み取れる。

4.-2 ネットと本を同時に使うことができる学校図書館での授業や、教室等で学校司書による資料提供や支援を受ける授業は、あなたにとって有意義ですか？（中高生への質問、１つを選択）

そう思う	78%
思わない	7%
わからない	15%

約８割がポジティブな反応を示した。理由としては「どちらも使えるともっと情報の信用性が上がるから」等、様々な資料を使う良さを挙げる声が多く「司書のアドバイスにより多角的な視点で学びを深められ、安心で効率的な資料選びができます」等、司書への信頼を裏付けるコメントも見られた。

（２）学校図書館の整備・活用に役立つ司書研修の企画・実施

１）学校司書に役立つ研修の実施

令和６年７月 29 日	BookReach を体験しよう！	浅石卓真氏（南山大学准教授） 宮田玲氏（東京大学講師） 矢田竣太郎氏（筑波大学准教授）
令和６年９月７日	「探究」を学びの中心に置く 軽井沢風越学園の実践	澤田英輔氏（軽井沢風越学園 国語科教諭） 大作光子氏（軽井沢風越学園 司書教諭）

令和６年度は「学校図書館の整備・活用に役立つ司書研修」を志向して、７月と９月の２回に分けて研修を企画・実施した。事業計画書には「楽しみのための読書と、調べるための読書は分けて考えられがちだが、本を読むことで得られる様々なチカラは、楽しみの読書からも調べる読書からも得ることは可能であり、そこに境界線があるわけではない。」と記載した。自立した探究的な学びが可能になるための日常的な「読書」の機会の提供を目指した研修を実施した。

１日目は授業で使える図書をまとめたブックリストの作成や学校図書館の活用事例にも役立てることができる授業支援ツールである「BookReach」の開発者である南山大学准教授浅石卓真氏、東京大学講師宮田玲氏、筑波大学矢田竣太郎氏を講師に迎え、参加者が BookReach を体験するという対面形式の研修を実施した。「BookReach」は令和５年度の本事業報告会でも学校図書館活用データベースとの連携を報告し、継続的に開発に協力している。研修では操作について学んだ後、BookReach を使って単元を想定したブックリストの作成を行った。

２日目は探究学習を学びの中心に位置付けている軽井沢風越学園国語科教諭澤田英輔氏、同学園司書教諭大作光子氏を講師に迎え、風越学園での授業実践についてお話をうかがった。この研修はオンラインで実施した。

１日目の研修は、附属学校司書を含む約 20 名の参加、２日目の研修は、約 80 名の申込があった。

２）研修アンケートの分析

１日目「BookReach を体験しよう！」（アンケート回答数 15 件）

満足度（とても満足+満足）	100%
実践度（今後も積極的に使ってみたいと思った+使ってみたいと思った）	88.9%

１日目の研修では「BookReach」を体験し、グループに分かれてブックリストを作成・共有した。参加者のほぼ全員が司書もしくは学校図書館に直接関わる仕事をしている方だった。

▶アンケート自由記述より（文末表現・誤記等は司書部会で編集）

●実際に体験し、開発担当者の方に質問や提案を直接伝えることができた。

●みんなと一緒に BookReach を実際に使ってみることができたので良かった。作成したものをグループで発表し、その場で感想を共有できたのが良かった。

●単元ごとにこんな本があるというのを先生方に知らせることができる。司書としても授業協力の事例として残すことができるのがとても良い。
●教科書に連動しているので、そこからアレンジすることが、ゼロから始めるより容易。

また、司書の目線で気がついた改善点も多く挙げられた。研修中にも開発者である講師の方々と意見を交わしながら、使い方を学ぶだけでなく、以下のような改良点や活用方法などが挙げられ、本研修での意見が反映された改良が現在も進んでいる。

●教科書単元の NDC の精度を上げてほしい。
●検索の自由度を上げてほしい。
●書誌情報をもっと多く入れてほしい。
●絵本も検索の対象に追加してほしい。

2 日目「探究」を学びの中心に置く軽井沢風越学園の実践（アンケート回答数 25 名）

満足度（とても満足+満足）	100%
実践度（とても活かせる+活かせる）	95.2%

2 日目の研修では「読書と探究」をテーマに、探究学習を学校の中心に位置づけている軽井沢風越学園の実践をうかがった。参加者は半数以上が学校司書、その他司書教諭・教諭、学生の参加もあった。

▶アンケート自由記述より（文末表現・誤記等は司書部会で編集）
●風越学園の図書館が学校の中のハブとして機能している様子、澤田先生の「読書家の時間」などの様子をうかがい知ることができた。
●理想的な「できた事」の発表ではなく試行錯誤を繰り返しているところや、悩みなども率直にお話くださったことで「遠い世界の話」ではなく、自分の日々の仕事や接している子どもたちや先生たち、悩みなどと地続きにリアルに考えることができた。
●図書館資料の活用と学習の内容との関係がわかりやすかった。また、指導目標がはっきりとした読書活動を実践されていて、とても参考になった。
●子ども発信の楽しい探究学習や、「難しい本を読めることがえらいのではない」の声掛け、読書一万ページ、作家を真似して書いてみることによる成長など、具体的な取り組みが大変参考になった。

アンケートの回答から、先駆的な実践を行っている風越学園から、自身の勤務校や職場ではどのように活かせるかを考えながら研修に参加していることが感じられる記述が多く見られた。アンケート回答で実践度が 95%超だったことからも意欲的な参加者の姿勢が窺える。

●これからの学校図書館において探究学習は重要であると考えている。風越学園の実践例や先生方の考えを知ることができ、参考にして先に進めることができるとても有意義な機会だった。
●すぐに出来ることは多くはないが、司書教諭と話す中で、提案をしたり、アイデアを共有したりすることが出来る場面があればしていきたいし、学んだことをアレンジし、何か出来たらと思案している。
●学校図書館だけで取り組んでいるのではなく、学校全体の教育方針の中で学校図書館が機能しているので、教員としても司書教諭としても出来ることを考えるきっかけになった。
●学校司書の立場から授業者の先生や児童の学びのサポートのヒントがもらえたら嬉しいと思って参加したので、自分の立場では何ができるか考えるきっかけになった。

３）考察

両日とも参加者へのアンケートで、全員から「満足した」という回答を得ることができた。また、今年度は5年ぶりに対面で研修を開催した。対面の研修は会場校である学校図書館（今年度は附属世田谷中学校）を見学できること、参加者同士で意見交換ができること、研修内容だけでなくそれぞれの勤務校の情報交換ができること、などリアルならではの良さを挙げ研修を評価している参加者が多かった。また、オンラインでの研修では、どこからでも参加できるという参加の自由度を評価している参加者が多かった。対面・オンライン両方の研修を実施することで、それぞれの良さが活かされた研修となったと評価している。

12月14日に行われた文科省事業報告会の視聴後のアンケートでは、報告会を視聴したことで「学校図書館に対する理解が深まったか」ということを参加者に回答してもらった。

「報告会を視聴して、学校図書館に対する理解は深まりましたか？」（アンケート回答数24名）

とても深まった+深まった	79.2%

▶アンケート自由記述より（文末表現・誤記等は司書部会で編集）

●小・中・高・大学それぞれの現場や専門家の声を聴くことで、学校図書館の「いま」を肌感覚で知ることができた。小中高大学という流れで学校図書館を俯瞰することができ、今自分が務めている中学校で、小学校から引き継いだものを次へどうつなげていくか再確認できた。

●今後の学校図書館を運営する上で大変参考になり、すぐにでも取り組みたいものもあった。

●いろいろな情報を知ること学び続けることが大切であると改めて思った。

自由記述からは、小・中・高・大学と多様な校種の実践や報告が聞けたこと、事業委員を始めとする専門家による話が聞けたことで自身の活動に活かしたり深く考えるきっかけとなったりした点が評価されていた。データベースによる事例の発信が継続的に行われていることを評価する声もあった。

また、アンケートからは読み取ることができないが、本報告会には本学司書教諭科目「情報メディアの活用」受講生によるレポート課題のための視聴をはじめ、多数の学生も参加している（延べ人数約90名）。本報告会が、未来を支える人材の学校図書館への理解の深まりにも貢献することを期待する。

４）次年度以降の研修の課題

今後も研修内容・研修スタイルについては参加者の要望に応えられるよう企画を進める予定である。今後受講してみたい研修テーマとしては、ICTに関する学びや探究学習での支援を挙げている方が多く、寄せられた意見を次年度以降の研修に反映させるつもりである。

課題としては、研修内容が参加者に滞りなく届くために、対面／オンラインどちらかに偏らない実施の検討や、オンラインの場合、配信機器の整備も重要な課題である。今年度、配信時に音声トラブルが発生した。今後も起こりうることなので、対応を検討していきたい。また、今年度の研修では見逃し配信のような当日参加できない人のためのフォローになる機会を設けることができなかった。リアルタイムで参加することの利点もあるが、多様なニーズに応えるためにも研修の発信方法については次年度以降柔軟に模索する考えである。

今年度の文科省事業報告会で報告があった、本学が企画運営をする教育支援者等を含む教育者個人の主体的な学びを支援するプラットフォーム「I Dig Edu」も今後新しい研修スタイルとして活用できるよう、連携しながら取り入れていけたらと考えている。

（３）『先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース』での発信

Ⅰ.データベース内での情報発信

表①　事例・記事総数（令和６年 12 月末現在）

	授業実践事例	授業と学校図書館	読書・情報リテラシー	今月の学校図書館	司書のアイデア玉手箱	司書のまなび
令和５年度	444	33	60	144	47	12
令和６年度	460（+16）	37（+4）	62（+2）	152（+8）	49（+2）	14（+2）

※学校図書館の日常　（令和６年１２月末現在）

学校図書館トピックス 149（前年度+6）／よみきかせ 150（+6）／ブックトーク 142（+6）／広報（お薦め本）143（+6）／レファレンス 140（+6）／テーマ展示 143（+6）

★1 月から６月までリニューアル作業のため更新をストップしていたことに加え、附属学校司書の負担軽減のため、「学校図書館の日常」記事の更新回数を昨年度より減らしている。

Ⅱ.授業実践事例の登録状況

●校種・教科別事例数

表②　校種・教科別事例数（令和６年 12 月末現在）

校種	幼稚園		小学校			中学校			高校			特別支援	計
教科			低学年	中学年	高学年	中１	中２	中３	高１	高２	高３		
国語			26 (19)	16 (14)	16 (13)	25 (22)	27 (24)	17 (15)	17 (16)	20 (17)	6 (6)	2 (1)	**172**
社会				6 (5)	12 (10)	12 (9)	6 (5)	8 (6)	6 (2)	7 (6)			**57**
数学				1 (1)	1 (1)	3 (3)	3 (3)	3 (3)	2 (1)	1 (1)	1		**15**
理科				4 (3)	9 (7)	4 (2)	3 (2)	1 (1)	4 (2)	1 (1)	2		**28**
生活科			6 (6)										**6**
音楽			2 (1)	4 (4)	4 (2)	1 (1)	2 (2)	1 (1)	3 (3)	3 (1)			**20**
書道											1		**1**
図工			3 (2)	1 (1)	1 (1)	1 (1)	1		4 (3)	4 (2)			**15**
保体			1 (1)	2 (1)	1 (1)	1 (1)	2 (1)			3 (1)			**10**
技術						2 (2)	1 (1)	1					**4**
家庭					3 (1)	5 (2)	5 (4)	3 (3)	1 (1)	9 (6)	1		**27**
外国語					1 (1)	1	3 (2)	3 (3)	3 (2)	5 (1)			**16**
道徳			2 (2)	1 (1)	1 (1)	2 (2)		2 (2)					**8**
総合			4 (2)	7 (6)	4 (2)	4 (3)	5 (3)	2 (2)	1	7 (4)	1 (1)	7 (7)	**42**
特活			1	8 (8)	2 (1)							2 (2)	**13**
情報									7 (2)				**7**
その他	5 (4)		4 (3)	1			2 (2)		2	3		2 (1)	**19**
小計	5 (4)		49 (36)	51 (44)	55 (41)	61 (48)	60 (49)	41 (36)	50 (32)	63 (40)	12 (7)	13 (11)	**460**

注）（　）内の数字は、指導案のある事例数。中等教育学校の事例は、中学校、高校に振り分けた。

　　は今年度追加された項目。事例 No.454 までを今年度分としてカウントした。

※今年度の文科省事業として、すべての附属学校で実践事例の提供またはブックリストの掲載を目指した。

校名	教科	対象学年	教科からの図書館への要望
附属世田谷小学校	生活科	小２	年末年始の行事や風習について調べる活動を考えています。
附属小金井小学校	国語	小４	自分が選んだ工芸品の紹介文を書くにあたり、適した資料を提供してほしい。
附属竹早小学校	保体	小５	「バウンダリー」についての授業の関連図書の紹介
附属大泉小学校	その他	小４	「自然の仕組みを関連させながら、自然がもたらす恵みと課題について探究する」ので災害・防災関係の資料を用意してほしい。
附属世田谷中学校	社会	中３	「よりよい民主主義・民主政治のために改善すべき問題は何か？」についてパネルディスカッション方式で学習するので、図書資料を用意してほしい。
附属小金井中学校	国語	中２	読書が苦手な人にも薦めたい本を選び、その紹介を書くために役に立ちそうな本や、紹介の仕方を例として提供してほしい。
附属竹早中学校	国語	中１	『竹取物語』を通読し、各場面を紹介する。資料の準備、オンラインデータベースについての解説、デジタル資料の活用に伴う著作権指導等をしてほしい。
附属国際中等教育学校	国語	高１	新語・流行語について調べる。その時代における言語表現や若者言葉など多様な資料を用意してほしい。
附属高等学校	古典	高２	古典作品のオリジナル翻訳・翻案に挑戦する図書館授業を行う。翻訳の広がる多様な資料を提供してほしい。
附属特別支援学校	その他	中学部	バリアフリー図書展示に合わせた本を紹介してほしい

Ⅲ. サイトのアクセス数

表③　サイトアクセス数（件）
（令和６年 12 月末現在）

令和６年度	
累計アクセス数	2,867,110
年間アクセス数	837,231

※今年度は、アクセス数がこれまでになく多くなった。
新システム移行に伴い、スマートフォンでのアクセスが増えたためではないかとも考えられるが、今後も注視していきたい。

Ⅳ. サイトの案内や広報活動

＊毎月発行していたメールマガジンは、システムの仕様変更のため発行を休止した。

＊X（旧 Twitter）　フォロワー数　　1831→1916（令和５年度→令和６年 12 月末現在）

現在、Facebook は休止中。X も不定期で情報を発信している。

＊本学教育実習生への広報

今年度も、「実習のてびき」に記載する他、各学校でも学校図書館の紹介とからめ講話等で案内した。「実習のてびき」は次年度に向け改定作業中。また、実習期間中に来館した際に、直接案内することも複数の学校で行われている。

＊本学学生へのサイト広報

・［担当教員］古家　眞　　［科目］教育支援概論Ａ　「学校スポーツと教育支援」など

・［担当教員］前田　稔　　［科目］「情報メディアの活用」など

＊外部へのサイト広報　（令和６年４月～令和７年３月）

時期	広報・掲載先	内容
5月	文京区学校図書館支援業務視察研修	学校図書館の施設見学、授業での活用事例とともにDBを紹介
6月	十文字女子大学司書教諭課程	「学校図書館メディアの構成」授業のなかでDBを紹介
6月	白山市学校図書館研修	学校司書・司書教諭・指導主事に向け渡邉教諭(附属世田谷中)とともに図書館活用についての講義でDB紹介
8月	学校図書館問題研究会　第39回さいたま大会	渡邉教諭と「学びの場にある学校図書館、どう使う？どう遊ぶ？」と題し報告する中でDB紹介
8月	第44回SLA高松大会動画部門への参加	DB紹介と、令和5年度の報告会における附属国際中等の授業実践の動画公開
10月	東京学芸大学2年生対象　地理歴史教育法	学校図書館を授業でどのように使うかの講話のDBを紹介
10月	学校図書館を考える会ねりま	学校図書館の施設、活用状況、授業支援、公共図書館との連携についての説明とともにDBを紹介
11月	図書館総合展　京セラ主催のイベントへの参加	「未来の学校図書館のカタチ」にパネリストとして参加し、DBを紹介
11月	第23回公開教育研究大会 （東京学芸大学附属高等学校図書館）	文科省調査官・学校関係者にDBを紹介
12月	東京学芸大学教職大学院生（国語科）	IBの学校図書館運営の説明とともに、DBを紹介
12月	早稲田大学司書課程受講者	小中学校図書館についての講義とともに、DBを紹介
1月	創価大学大学院生	IBの学校図書館運営の説明とともに、DBを紹介
2月	江戸川区学校図書館運営協議会	江戸川区立小中学校図書館の指定管理者を通じて附属校の実践事例の紹介、報告会や夏の研修・DBの案内
その他		
『図書館にまいこんだ　こども【超】大質問』(こどもの大質問編集部編　青春出版社　2024)にてDB掲載のレファレンス事例を採用		
『中高生のための読書　図書館総目録YA2024』に「学校のなかにある図書館ができること」と題する文章のなかで、DBを紹介		
『学校司書の役割と活動　改訂版』（金沢みどり監修　学文社　2024）で実践と共にDB紹介		
小学館『小学校教員のための教育情報メディア　みんなの教育技術』ウェブサイト連載「子供たちといっしょに読みたい今月の本」(4月号～)の記事内にてDBを紹介		

Ⅴ．今年度の成果と次年度への課題

今年度はデータベース（以下 DB）が新システムへと移行し、本格的に稼働し始めた。具体的な改修内容としては昨年度の『みんなで使おう！学校図書館 vol.15』p.21「新しくなる先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」に詳しい記述がある。従来の使い勝手を踏襲する形でスマホでもパソコンとほぼ同じレイアウトで表示できるようになり、利用者の操作性が大幅に向上した。システム移行の際に若干のトラブルも確認されているが、今後少しずつ修正し、さらなる利便性の追求を図っていく。

また、新たな取り組みとして、東京学芸大学が企画運営する「I Dig Edu（アイ・ディグ・エデュ）※」とも連携し、DB に同事業のリンクを貼るとともに、昨年度の事業報告会で発表された附属学校の実践報告を、e-ラーニングの学習コンテンツの一つとして同事業サイトに掲載することとなった。学校図書館の利活用を推進するために、教育に関わる様々な立場の人に視聴してもらいたい。

※ I Dig Edu･･･教育支援者等を含む教育者個人が主体的に学べるコンテンツを提供するプラットフォーム。

https://idigedu-catalog.etudes.jp/gakugeidaientry/act/v1/top

システム更新に伴う数ヶ月のサービス停止期間にも、旧サイトへの継続的なアクセスや、新システムを待ち遠しく思う期待のお声をいただいており、本 DB が学校図書館運営に大きく貢献している様子が伝わってきた。今後も積極的に外部からの実践事例・記事提供を募り、ともに学校図書館を活発にしていきたいと願う。

大学附属図書館との連携

東京学芸大学　学術情報課長　山崎 裕子

東京学芸大学の附属図書館と附属学校は様々な形で連携を行っている。連携の場は附属図書館の館内とウェブサイト上の 2 つに大別できる。

附属図書館内

・学校図書館コーナー（1 階）

各附属学校図書館の蔵書をもとに児童向け図書や絵本を整備しており、学校図書館の雰囲気を大学で味わうことができる。附属学校の生徒は各校に配布してある利用証で資料の借用が可能である。各附属学校図書館の紹介コーナーでは各館の関連情報や広報物を掲示している。

・教育実習用図書コーナー（1 階）

本学の教育実習担当教員・附属学校教員が推薦した本をリストとともに置いており、教育実習の準備を行う本学の学生に活用されている。毎年リストの更新を行い、未所蔵の資料はすべて購入している。

・附属学校の成果物展示（2 階）

各附属学校の授業において、学校図書館を活用して作成した成果物を展示している。教科を問わず、各附属学校の先進的な教育の実践例を窺い知ることができる。展示事例として、「文学は戦争を抑止するのか？」（附属国際中等教育学校）、「投資に関するまとめ」（附属高等学校）等がある。

・手作り什器の活用（1 階）

東京学芸大 Explayground のラボのひとつ “GREEN TECH ENGINEER LAB” に参加している附属小金井中学校の生徒たちが、間伐材を活用した什器等を自作しており、附属図書館ではベンチ・棚・掲示板の寄贈を受けている。

ウェブサイト上

・東京学芸大学附属図書館かわらばん（https://lib.u-gakugei.ac.jp/about/publications#tkawaraban）

附属図書館では年 2 回程度、図書館ウェブサイト上で広報誌を発行している。2021 年から附属学校図書館の図書紹介コーナーを連載し、各学校の司書に執筆を依頼している。

・学校図書館活用データベース

（https://www2.u-gakugei.ac.jp/~schoolib_v2/htdocs/index.php?m=4&j=510#gsc.tab=0）

2009 年に東京学芸大学学校図書館運営専門委員会で立ち上げたもので、学校図書館を活用して行った授業を校種・教科別にデータベース化している。授業実践事例は約 440 件である（2024 年 11 月現在）。

・GAKUMOPAC（https://www2.u-gakugei.ac.jp/~schoolib/gakumopac/）

附属図書館、附属学校 10 校の図書館と 1 園舎、附属学校近隣の図書館等の蔵書を横断検索するシステムである。東京学芸大学学校図書館運営専門委員会と株式会社カーリルとの連携・協力協定により実現した。

・デジタル書架ギャラリー（https://lib.u-gakugei.ac.jp/mol/shoka）

図書館の書架画像をウェブで公開し、オンライン上でブラウジング可能にしたものである。コロナ禍の 2020 年 6 月に附属図書館の書架画像を、2022 年 4 月に附属世田谷中学校と附属小金井小学校の書架画像を公開した。2024 年現在、Explayground 協力のもと京セラコミュニケーションシステムとともに、附属世田谷中学校にて BookReach への機能実装などデジタル書架のさらなる試みを進めている。

鼎談「激動の時代の学校図書館を考える：
情報教育や探究型学習、学校図書館活用DBを通じて」

司会進行 ：今井 福司氏（白百合女子大学准教授）
高橋 菜奈子氏（新潟大学学術情報部長）
小野 永貴氏（筑波大学図書館情報メディア系助教）

令和6年度の報告会では、第3部として、「激動の時代の学校図書館を考える：情報教育や探究型学習、学校図書館活用DBを通じて」と題して、事業委員の今井福司氏、高橋菜奈子氏、そして、附属世田谷中、附属高校の卒業生で、学校図書館研究者の小野永貴氏に45分間鼎談をしていただいた。今井氏を司会に、それぞれからの話題提供をきっかけに、3つのテーマについて自由にお話しいただいたが、情報メディア分野や情報教育分野に明るいお三方だからこその、まさに激動の時代を映した刺激的な内容となった。

1. 今井福司氏より話題提供：情報活用能力をめぐって学校図書館が考えておくべきこと

まず今井氏から、「総合的な学習の時間」について文部科学省（以下文科省）の公表している解説書[i]における探究のらせん構造や、全国学校図書館協議会（以下SLA）の示す「情報資源を活用する学びの指導体系表」[ii]と、文科省の「情報活用能力の体系表列」[iii]との間にある違い、違和感について指摘があった。「探究」というキーワード、「情報活用」という観点で見たとき、SLAと文科省には、大枠として似ているところはあるものの、文科省の資料の中身は完全にコンピュータ系、所謂「情報教育」の項目ばかりとなっているのである。一方、American Association of School Librarys （アメリカの学校図書館に関する団体：以下AASL）のStandards Crosswalks[iv]（情報教育に対する様々な基準に照らして、AASLの基準がどう対応しているかを整理したもの）のような海外の事例では、例えばGoogleのコンピュータ・サイエンスに関するカリキュラムとNational School Library Standards（全国学校図書館基準）との整合性を一覧できるなど、図書館と情報教育とのつながりが見て取れる。

これに対し、小野氏からは教科「情報」ができるまでの歴史的経緯を見ると、SLAの資料と文科省の資料が示す「情報活用能力」の間にある乖離はある意味しかたがない、との補足と解説があった。必修になった高校の教科「情報Ⅰ」については、「科学的に裏打ちされた」情報活用能力の育成、「コンピュータを中心とした、情報技術を活用しながらの問題発見、問題解決を重視する」ことが、学習指導要領においても非常に強調されており、現場において学校図書館が「情報センター」として学術情報流通の中心になることがますます難しくなってきてしまっている。

また、高橋氏からは、大学にも情報活用能力の育成に関する体系表はあるものの、小学校から高校までの教育とつながっていないことへの懸念が語られた。これを受け、今井氏は「学校図書館法」が小中高の学校図書館と、大学図書館をはじめ、他の図書館との間の断絶の一因となっている可能性を示しつつ、「情報教育」と図書館にせよ、大学と小中高にせよ、歴史的な背景により仕方のない面もあるものの、お互いに連続性を意識する必要があるのではないか、と課題の共有がなされた。

2. 高橋菜奈子氏より話題提供：情報センターを運営するために知っておくとよいこと

高橋氏は、大学図書館の情報化の歴史を年表の形に整理したものを辿ることから話を始めた。すなわち、80年代から目録の機械化がはじまり、95年のOPACのWEB公開を経て、90年代後半には電子ジャーナルが登場、2000年代には、電子図書館やデジタルアーカイブ、機関リポジトリによる論文公開も始まっている。2010年代には、CiNii、NDLサーチなど各種情報サービスが隆盛となり、一般的にもスマートホンやSNSが普及した。2020年代は統合型プラットフォーム（ジャパンサーチや、CiNii Researchなど）や、研究データ管理プラットフォーム（学認RDM）が登場し、現在、生成AI全盛の時代を迎えている。人間が情報を読み込む時代から、機械が情報を読み込む時代への変化が感じられるが、重要なのは、大学図書館のデジタル化の進展が、大学での研究のデジタル化についていく形で起こったことである。学校は、まさに今激動の時代で、2019年GIGAスクール構想があり、コロナ禍もあって、学校が変われば学校図書館も変わっていくことになるだろう。情報センターとして学校を支えるためには、様々な情報を様々な形で提供し、データを更新しつつ蓄積して維持していくことが必要である。また、Webへの情報公開と、Web上にある情報の活用が大切になっていくとまとめた。

これに対し、今井氏は、コロナ禍以後、学校図書館は学校のDX化に何とかついて行っているところと、取り残されているところの格差が顕著になっていると指摘。加えて、図書館学が図書館情報学に変

化してきたことを引き合いに、今は、学校図書館研究においても一つの転換点で、学校図書館が持つ情報資源自体を分析する流れが出てきていると述べた。

小野氏からは、学校教育においてICT活用は急速に進んだが、それはSLAが定義するような広義の「情報活用能力」の開発・育成には当たらず、むしろ後退させたかもしれない、情報による人々の分断が顕在化してきているとの指摘があった。また、大学図書館のように学校図書館も変わっていくためには、大学図書館と、大学の情報基盤担当部署との組織的なつながりも参考にできるのではないか、と大学の状況への質問があった。これに対し高橋氏からは、大学図書館も大学の情報教育や情報担当と必ずしもうまくつながれているわけではないが、図書館システムの運営・管理をきっかけに、一緒にやっていくことで少しずつ関係を深めてきたことが伝えられた。そこで小野氏が、図書館の担当者と、情報の担当者、それぞれの専門性が学内で周知され、信頼を得ていくことの重要性を大学図書館から学べると述べると、今井氏から、大学図書館と学校図書館の間には、実は共有できる問題もあるので仲良くしたら良い、と両者のより良い連携を望む発言もあった。

3. 小野永貴氏より話題提供：激動の入試改革の時代に、学校図書館は探究の中心になり得るか

小野氏からは、学校図書館は本当に情報センターとしての使命を果たせているのか、という問題提起があった。学校図書館に存在意義があることは間違いないのだが、全校でその役割が実感を伴って認識され、授業や指導の中で活用されなければ、使命を果たしているとは言えない。大学入試というものが学校のカリキュラムに大きく影響を与え、どうしても、入試を乗り切るスキルを学ぶことに学習が傾きがちになるなかでも、学校図書館が本当に役に立つものであるのかが問われている。

今、大学入試をめぐってどのような激動が起きているのかといえば、まずは大学入試共通テストへの教科「情報」の新設があり、AO入試、推薦入試の増加も挙げられる。これらの動きは、一見図書館にとって、その存在価値が増す好機に見えるが、実際は必ずしもそうではない。まず、「情報」の入試対策における関心の中心は「情報活用能力」ではなく、コンピュータとプログラミングだ。AO入試、推薦入試の増加により、探究学習の重要性、学校図書館が果たす役割は増しているはずだが、そもそもAO入試や推薦入試への世間の理解と信頼が追い付いていない。知識を問う一般入試こそ公平・公正な試験のありかただという意識が根強く、「探究学習なんてやる意味あるの？」というクレームに繋がりやすい。また、探究学習をやっていても、図書、新聞、論文といった図書館が提供するような情報より、WebページやWebサイトを参考文献にあげている割合が多いという調査結果も示しつつ、このような状況を、学校図書館はどう乗り越えていったらいいか、と問いかけた。

高橋氏は、大変難しい問題で答えは出ないが、AO入試が探究学習に与えるインパクトは大きいだろう、との見解を示した。今後、高校での探究の成果がそのまま入試に使われることになる可能性と合わせて、「入試のため」の探究となってしまう危険性も指摘した。

最後に、今井氏が、AO入試が一般入試と学力的に比較される風潮はあり、一般入試を突破する人間は確かに能力が高い。しかし、研究に対するモチベーションのような、数値では測れない評価軸も持っていなくてはならないだろうと述べ、鼎談を締めくくった。

---

[i] 文部科学省『今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開』（小学校編）
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/sougou/20210729-mxt_kouhou02_1.pdf

[ii] 全国学校図書館評議会「情報資源を活用する学びの指導体系表」
20241001manabinosidoutaikeihyou.pdf

[iii] 文科省
「【情報活用能力の体系表例（IE-Schoolにおける指導計画を基にステップ別に整理したもの）】（令和元年度版）全体版
https://www.mext.go.jp/content/20201014-mxt_jogai01-100003163_005.pdf

[iv] AASL
「Crosswalks - National School Library Standards」
https://standards.aasl.org/project/crosswalks/

【資料】

■附属学校図書館データ一覧

東京学芸大学附属世田谷小学校　メディアルーム　（令和６年 12 月末現在）

司書教諭　：　梅田翼　河野広和	司書　：　金澤　磨樹子（週５日）	
開館時間　：　8:15～16:15	授業での使用時間：　18 時間／週＋不定期利用	
児童・生徒数　：　615 名	学級数　：　18 学級	教職員数（含非常勤）：　65 名
蔵書冊数　：　20,632 冊	床面積　：　160 ㎡	座席数　：　40 席
４-12 月貸出冊数　：　42 ,952 冊	児童・生徒の平均貸出数　：　69 冊／人	
年間予算　：　185 万円　（含消耗品・教員図書・図書館システム運用代）		
購読新聞　：　２紙　「朝日小学生新聞」「毎日小学生新聞」		
購読雑誌　：　６誌　「月刊 NEWS がわかる」「子供の科学」「月刊ジュニアエラ」他		
オンラインデータベース　：　電子書籍サービス　Yomokka!		
インターネット環境　：　無線 LAN	電子図書館	未導入
情報機器・設備　：　管理用 PC　１台 ／ 検索用 iPad　４台 ／ ノート PC（司書用）１台／iPad 司書用１台／大型モニター　１台 ／ ホワイトボード　２台		
貸出管理ソフト　：　情報館	書誌データ入力方法　：　NDL 蔵書目録から取り込み	
学外の他機関との連携協力体制　：　世田谷区立図書館（団体貸出）（株）カーリル		

【令和６年度の活動】

＊メディアの時間（図書の時間）は、全クラス週１時間割り当て担当者を明確に示す。

・１年生：図鑑の利用指導・読書ノートの開始　（書誌の書き方・分類の書き方）

・２ 年生：メディアルームで秋探し（秋に関する本を探し、紹介する）／図鑑の利用指導（復習）

・３ 年生：ポプラディア利用指導／『おすすめの本 10 冊チャレンジ』のリスト配布 ／交換読書／テーマを提示し違う分類の本を３冊探すゲーム／感動する本の紹介活動

・４ 年生：『おすすめの本 10 冊チャレンジ』のリスト配布／「たくさんのふしぎ」につながる本の紹介／10 冊の本を分類に分けるゲーム／「ゴミ」のパスファインダー作り／おすすめの本のポップ作成

・５ 年生：岩波少年文庫を読む／データリテラシー／メディアリテラシー／おすすめの本の宣伝活動

・６ 年生：『ノンフィクション 50 冊』のリスト配布／KJ 法／検索について／プレゼンについて

・給食室とコラボ 11 月『おはなし給食』（ 給食のメニューに出てくる本の紹介）

・ラボの時間（個人での探究の時間）：レファレンス／資料提供／著作権についての説明など

東京学芸大学附属小金井小学校　なでしこ図書館

（令和６年12月末現在）

司書教諭　：　西岡　里奈	司書　：　松岡　みどり（週５日）	
開館時間　：　8:30～15:30	授業での使用時間：　18時間／週＋不定期利用	
児童・生徒数：　610名	学級数　：　18学級	教職員数（含非常勤）：　48名
蔵書冊数：　24,924冊	床面積　：　92㎡(※)	座席数　：　6席(※)
4-12月貸出冊数:　20,503冊	児童・生徒の平均貸出冊数　：　33冊／人	
年間予算：　120万円　（図書費・消耗品費）		
購読新聞：　2紙　「朝日小学生新聞」「読売KoDoMo新聞」		
購読雑誌：　4誌　「月刊NEWSがわかる」「月刊ジュニアエラ」「Newton」「たくさんのふしぎ」		
オンラインデータベース：　1件　電子書籍サービス「Mottosokka！」		
インターネット環境：　LANケーブル	電子図書館　：　未導入	
情報機器・設備：　管理用PC　1台　／　検索用PC　2台　／　書画カメラ　1台		
貸出管理ソフト：　LS@SCHOOL	書誌データ入力方法：　TOOLi-SよりMARCダウンロード	
学外の他機関との連携協力体制：　小金井市立図書館（団体貸出・学級貸出），（株）カーリル		

【令和６年度の活動】

（※）校舎改修工事に伴い、令和６年４月～７月は仮教室で運営。９月以降新しく設置した図書館で運営。ただし校舎改修工事中は一部を教室として使用しているため、読書スペースが確保できていない。図書の時間の読書スペースとして、教室を使用。

・ビブリオバトルの実施（３年・４年）
・図書委員会による本、図書館に親しむための企画実施
・横山英吏子栄養教諭との「おはなし献立」の実施。「おはなし献立」に関連する図書の展示
・単元のテーマに関連した図書のクラス貸出
・「Yomokka！」を使用した読み聞かせの実施（４年）
・おすすめの本の紹介、発表（２年）
・おすすめの本のポップ・帯の作成、展示（４年）
・生き物、のりものの図鑑作成、展示（１年）

東京学芸大学附属大泉小学校　マルチメディア室

（令和６年 12 月末現在）

司書教諭　：　山下 美香	司書　：　富澤 佳恵子（週５日）	
開館時間　：8:00～16:30	授業での使用時間：　12 時間／週＋不定期利用	
児童・生徒数　：　582 名	学級数　：　22 学級	教職員数（含非常勤）：　45 名
蔵書冊数　：　14,562 冊	床面積　：　160 ㎡	座席数　：　50 席
4-12 月貸出冊数　：　12,061 冊	児童・生徒の平均貸出数　：　20 冊／人	
年間予算　：　110 万円　（含消耗品・教員図書・図書館システム運用代）		
購読新聞　：　２紙　「朝日小学生新聞」「読売 KoDoMo 新聞」		
購読雑誌　：　２誌　「月刊 NEWS がわかる」「子供の科学」		
オンラインデータベース　：　０件		
インターネット環境　：　無線 LAN	電子図書館　：　未導入	
情報機器・設備　：管理用 PC　１台／検索用 PC　１台／児童用タブレット　５台／司書用 iPad１ 台／児童用 iPad　３台／複合機 １台／ホワイトボード ３台／モニター １台／書画カメラ １台		
貸出管理ソフト　：　図書丸ねっと	書誌データ入力方法　：TOOLi-S, JAPAN/MARC より MARC ダウンロード	
学外の他機関との連携協力体制　：　練馬区立図書館（団体貸出、連絡協議会）　（株）カーリル		

【令和６年度の活動】

・読み聞かせ：１学期より国際学級への保護者による読み聞かせを再開

・「図書だより」の発行（司書教諭、学校司書で分担して執筆）

・菊の子文庫（マルチメディア室推薦図書リスト）：２年・３年・４年

・児童の言語状況調査を実施

・校内 DVD を PTA から移管、一部貸出を開始

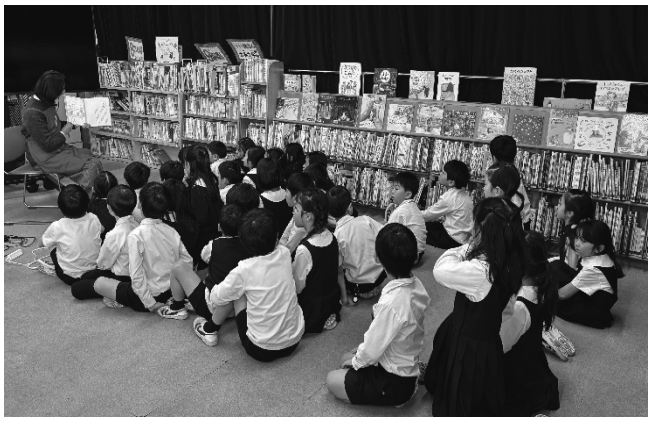
・授業支援：１年学級文庫用意、探究プログラム「わたしたちはきせつとともにいきている」（資料用意）／２年探究プログラム「人々は、おたがいの文化と心を分かり合うことでよりよいかんけいをつくることができる」（資料準備）／３年探究プログラム「経済活動は、人々が関わり知恵を出し合うことで成り立っている。」（資料準備）／４年探究プログラム「自然は、人間社会に課題と適応の機会を与える」（資料用意）／５年国語「好きな詩のよさを伝えよう」（調査補助）／６年探究オリエンテーション（著作権について）、「私たちは、互いの権利を自覚し、自由と幸せを模索しあっている」（資料用意）

東京学芸大学附属竹早小学校　メディアセンター（小中共用）　（令和６年12月末現在）

司書教諭　：　高須　みどり	司書　：　宮崎　伊豆美（週４日：火～金曜）	
開館時間　：　9:30～16:30	授業での使用時間：　12時間／週＋不定期利用	
児童・生徒数　：　410名	学級数　：　12学級	教職員数（含非常勤）：　25名
蔵書冊数　：　14,047冊 （小中計28669冊）	床面積　：　280㎡	座席数　：50席（最大80席）
4-12月貸出冊数　：　19039冊	児童・生徒の平均貸出数　：　44冊／人	
年間予算　：　110万円（含消耗品・図書館システム運用代）		
購読新聞　：　なし（中学購入新聞閲覧可能）	購読雑誌　：なし	
オンラインデータベース　：　電子書籍サービスMottosokka！		
インターネット環境　：無線LAN	電子図書館　：　未導入	
情報機器・設備　：　管理用PC　小中各１台 ／ 検索用PC　１台 ／複合機　１台 ／ ホワイトボード　３台　／（大型モニター、プロジェクター借用中）		
貸出管理ソフト　：　LS@SCHOOL	書誌データ入力方法　：　TOOLi-SよりMARCダウンロード	
学外の他機関との連携協力体制　：文京区立図書館（団体貸出）　㈱カーリル(簡易OAPC作成)　ポプラ社		

【令和６年度の活動】

・４月全クラスにオリエンテーション実施(2・３年：分類、４年：百科事典、５年：年鑑、６年：出典)
・全クラス週１回メディアの時間に、読み聞かせ・ブックトーク・テーマ読書など実施。
・「メディアセンター便り」の発行　・おはなし給食支援（毎月１回）
・デジタルプラットフォーム「竹早ライブラリー」の管理、更新
・授業資料支援：１年「よみきかせ」「いきものかくれんぼ」「むかしばなし」／ ２年「祭り」「サバイバル・キャンプ」「図鑑の使い方」「詩」／３年「百科事典の使い方」「昔のくらし」「世界の昔話」／４年「のはらうた」「スポーツ」／５年「重松清」「ゲームブック」「椋鳩十」「ことば」／６年「物語の書き方」「宮沢賢治」「落語」「純文学」
・保護者おはなし会（全クラス年３回）



東京学芸大学附属世田谷中学校　図書館

（令和６年 12 月現在）

司書教諭　：　阿部　由美	司書　：　村上 恭子（週５日）	
開館時間　：　8:30～16：30	授業での使用時間　：　144 時間／年	
児童・生徒数　：　416 名	学級数　：　12 学級	教職員数（含非常勤）：　42 名
蔵書冊数　：　25,603 冊	床面積　：　144 ㎡	座席数　：　40 席
4-12 月貸出冊数　：　2,712 冊	児童・生徒の平均貸出冊数　：　6.45 冊／人	
年間予算　：　200 万円　（含消耗品）		
購読新聞　：　２紙　「東京新聞」「朝日中高生新聞」		
購読雑誌　：　11 誌　「月刊ジュニアエラ」「Newton」「鉄道ファン」「スクリーン」他		
オンラインデータベース：　２件　「スクールヨミダス」「ﾙｰﾗﾙ電子図書館」		
インターネット環境　：　無線 LAN	電子図書館　「LibrariE」	
情報機器・設備　：　管理用 PC　１台　／　検索用 PC　１台　／　iPad　37 台　／　PC　２台　／　コピー機　１台　／　大型ディスプレイ　１台　ホワイトボード　２台		
貸出管理ソフト：　情報館	書誌データ入力方法　：　NDL 蔵書目録からの取り込み	
学外の他機関との連携協力体制：　世田谷区立図書館（団体貸出）		

【令和６年度の主な活動】
・４月　オリエンテーション（1 年国語　３時間） ・５月　「修学旅行の想いを託す／重ねる歌を選ぶ」（3 年国語科）・日本文学を読む（2 年国語） ・６月　ディベートのための資料探し（3 年社会科） ・９月　新書回転寿司（２年国語）・１年国語特別授業「歌人木下龍也さんを迎えて」 ・10 月　小さな読書会 描写で語る（2 年国語）・書き出し大賞（1 年国語）・「言葉の獣」（3 年美術＋国語） ・11 月　「日本の民主主義を考える」（3 年社会科） ・12 月　アフリカの今日的課題（1 年社会科） ・ブックカフェ実施　早川書房企画読書会　9.11 レポート住山さんをお迎えして　文房具カフェ　黒田先生、家を建てる　はにわレポート（主催 図書委員会 対象 一般生徒） ・芸術発表会　ブックカフェの紹介

東京学芸大学附属小金井中学校　図書館

（令和６年 12 月末現在）

司書教諭　：　数井　千春	司書　：　長友　春陽（週５日）	
開館時間　：　10:00～17:00	授業での使用時間：　123 時間／年	
児童・生徒数　：　420 名	学級数　：　12 学級	教職員数（含非常勤）：　40 名
蔵書冊数　：　16,463 冊	床面積　：　136 ㎡	座席数　：　44 席
4-12 月貸出冊数：　1,555 冊	児童・生徒の平均貸出数　：　3.7 冊／人	
年間予算　：　129 万円　（含消耗品、備品、システム代）		
購読新聞　：　３紙　「産経新聞」「毎日新聞」「読売新聞」（「朝日新聞」は教員室で購入）		
購読雑誌　：　３誌　「月刊 NEWS がわかる」「ナショナルジオグラフィック　日本版」「Number」		
オンラインデータベース　：　０件		
インターネット環境　：　LAN ケーブル	電子図書館	未導入
情報機器・設備　：　管理用 PC　１台 業務用 PC　１台　／　ホワイトボード　１台		
貸出管理ソフト　：　情報館	書誌データ入力方法　：　NDL 蔵書目録からの取り込み	
学外の他機関との連携協力体制　：　小金井市立図書館（団体貸出）　（株）カーリル		

【令和６年度の活動】

・司書教諭とともに１年生向けにオリエンテーションを４月に実施。
・図書館学の実習生の受け入れ、展示やイベントの実施
・館内のレイアウト変更、除籍本の配布
・教育実習生の図書館見学
・授業への協力：国語（万葉集、読書にのろう）、私の主張発表会の発表原稿づくりの際の資料提供、社会、美術（自由制作の題材探し）、総合学習（修学旅行の事前学習・課題本）、課題・卒業研究、英語（多読）、保健体育（健康と環境等）
・展示（新着本、課題図書等）
・図書委員会による活動（常時活動、学芸発表会での展示）

東京学芸大学附属竹早中学校　メディアセンター(小中共用)　（令和６年 12 月末現在）

司書教諭　：　荻野　聡	司書　：　中村　誠子（週５日）	
開館時間　：　10:00～16:00 放課後開館の日は 16:45 まで	授業での使用時間：　84 時間／年(教室支援含む)	
児童・生徒数　：　420 名	学級数　：　12 学級	教職員数（含非常勤）：　38 名
蔵書冊数　：　14,622 冊 （小中計 28,669 冊）	床面積　：　280 ㎡	座席数　：　50 席(最大 80 席)
4-12 月貸出冊数　：　1,556 冊	児童・生徒の平均貸出数　：　3.7 冊／人	
年間予算　：　120 万円　（別途環境整備費）		
購読新聞　：　1 紙　「朝日新聞」(予算外)		
購読雑誌　：　11 誌　「Newton」「鉄道ファン」「ダ・ヴィンチ」「新聞ダイジェスト」 「SportsGraphic　Number」「café-sweets」「MUSICA」他		
オンラインデータベース　：　「ジャパンナレッジ School」トライアル('24 年 10 月～'25 年 3 月)		
インターネット環境　：　無線 LAN	電子図書館　：　未導入	
情報機器・設備　：　管理用 PC　小中各 1 台 ／ 検索用 PC　1 台 ／ 生徒用タブレット　5 台 複合機　1 台 ／ ホワイトボード　2 台 ／ 大型モニター　1 台		
貸出管理ソフト　：　LS@SCHOOL	書誌データ入力方法　：　TOOLi-S より MARC ダウンロード	
学外の他機関との連携協力体制　：　文京区立図書館（団体貸出）　㈱カーリル(簡易 OPAC)		

【令和６年度の活動】
《1 年生》国語「お気に入りの本を紹介しよう―POP 制作とプレゼンテーション―」 「『竹取物語』の各場面を紹介する」／社会「世界の諸地域を調べる」　他 《2 年生》美術「タブレット端末を光源とした光の造形物」／総合「奈良・京都校外学習　事前学習」／ 国語「ココプロ：国語科個人研究プロジェクト」「ビブリオバトル」　他 《図書委員会》文化研究発表会への参加／国立附属学校図書委員会交流会への参加／POP コンテスト 《その他》全校生徒の自由研究･卒業論文支援／館内イベント実施／新規購入雑誌希望調査／ 生徒・教職員への利用アンケート／図書館通信発行　など

東京学芸大学附属国際中等教育学校　総合メディアセンター

（令和６年 12 月末現在）

司書教諭　：　野島　淳司	司書　：　渡邊 有理子（週５日）	
開館時間　：　9:00～17：00	授業での使用時間　：　時間　319 時間	
児童・生徒数　：　727 名	学級数　：　24 学級	教職員数（含非常勤）：　82 名
蔵書冊数　：　29,6953	床面積　：　326 ㎡	座席数　：　50 席
４月 - 12 月貸出数：　4,117 冊	児童・生徒の平均貸出冊数　：　前期生：6.2 冊／人 後期生：4.8 冊／人	
年間予算　：　230 万円　（含消耗品・電子図書館コンテンツ費）		
購読新聞　：　６紙　「朝日新聞」「読売新聞」「毎日新聞」「東京新聞」 「The Japan Times Alpha」「The New York Times」		
購読雑誌　：　18 誌　「Newton」「ソトコト」「ダヴィンチ」「TIME」「The Economist」他		
オンラインデータベース　：　３件　「朝日クロスサーチ」「理科年表」「化学書資料館」		
インターネット環境　：　無線 LAN	電子図書館：　OverDrive	
情報機器・設備　：　管理用 PC　１台　／　検索用 PC　２台　／　生徒用ノート PC　35 台 ipad １台　／　HD 液晶パネル　６台　／　ホワイトボード　３台		
貸出管理ソフト　：　情報館 V9	書誌データ入力方法　：　NDL 蔵書目録からの取り込み	
学外の他機関との連携協力体制　：　練馬区立図書館（団体貸出、連絡協議会）、国立国会図書館		

【令和６年度の活動】
中１：生物「脊椎動物調べ」、理科×美術「未知の生物ボッケモン」の館内展示（３学期）
中２：日本文化探訪「能と狂言」
中３：英語「生命倫理」国語「俳句と歳時記」
高１：英語「21 世紀のフォトジャーナル光と影」、国語「新語・流行語」「白書関係」
高２：国語「夏目漱石と『こころ』関係」、「三国志、史記関係」
高３：DP 文学「井上ひさし『父と暮せば』ほか」、「竹取物語」
＊全校生徒に母語支援アンケートを実施（１学期）
＊大学図書館 2F 展示（１学期）　DP6 年文学：テーマ「文学は戦争を抑止するのか？」

東京学芸大学附属高等学校　図書館

（令和６年 12 月末現在）

司書教諭　：　　来原　智美	司書　：　　岡田　和美（週 5 日）	
開館時間　：　　9:30～16：45	授業での使用時間　：　　150 時間／年+不定期利用	
児童・生徒数　：　　963 名	学級数　：　24 学級	教職員数（含非常勤）：　85
蔵書冊数　：　31,573 冊	床面積　：　359.25 ㎡	座席数　：　140 席
年間貸出総数　：　　1,800 冊	児童・生徒の平均貸出冊数　：　2 冊／人	
年間予算　：　407 万円　　（含消耗品・教員研究図書）		
購読新聞　：　4 紙　　「朝日新聞」「毎日新聞」「読売新聞」「The Japan Tines」		
購読雑誌　：　65 誌　　「TIME」「日経サイエンス」「Newton」「芸術新潮」「天文ガイド」「数学セミナー」「大学への数学」「遺伝」「栄養と料理」他		
オンラインデータベース　：　1 件　　「朝日けんさくくん」　　電子書籍　LibrariE		
インターネット環境　：　　無線 LAN		
情報機器・設備　：　管理用 PC　3 台　検索用 PC　8 台　プロジェクター　1 台　大型ディスプレイ 2 台　ホワイトボード　2 台　コピー機　1 台　プリンター　2 台		
貸出管理ソフト　：　情報館	書誌データ入力方法　：　Tooli-s より MARC ダウンロード	
学外の他機関との連携協力体制　：　世田谷区立図書館　女性教育情報センター　防災専門図書館　国会図書館　東京都立中央図書館　東京都国立博物館　サントリー美術館		

【令和６年度の活動】

・第 23 回公開教育研究大会　「金融教育」家庭科＋社会科＋学校図書館　司書実践発表
・第 23 回公開教育研究大会　「源氏物語」国語＋音楽＋美術＋書道　4 教科横断資料支援
・図書館オリエンテーション（4 月）学芸大学教育実習生図書館オリエンテーション（6 月）
・学芸大学教育実習生図書館授業支援「パスファインダーを使ってエシカルを調べてみよう」
・地理授業図書館活用支援「気候と地理との関連」
・探究授業支援・指導・関連資料の選書および受け入れ「ギフテットと教育・絵画における地域性・地域医療・行動経済学・アマモ・AI と感情・岩石　他」
・日本経済新聞　図書館授業取材　「高校生　投資で経済を学ぶ」　2024/5/11
・テレビ東京「THE 名門校」館内資料展示放送
　・館内冷暖房設備新設

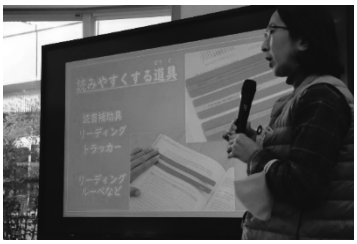
東京学芸大学附属特別支援学校　プレイルーム（幼稚部図書コーナー）
個別学習室Ⅱ（小学部図書コーナー）
ランチルーム（中学部図書コーナー）
生徒会室　　（高等部図書コーナー）

（令和 6 年 12 月末現在）

司書教諭　：　堀田椋（小学部）		司書　：　宮崎　伊豆美（年 19 日）			
開館時間　：　オープンのため特になし		授業での使用時間　：　2 時間（特設）／年			
児童・生徒数：	幼稚部　5 名 小学部　17 名 中学部　18 名 高等部　27 名	学級数　：	幼稚部　1 学級 小学部　3 学級 中学部　3 学級 高等部　3 学級	教職員（含非常勤）：	幼稚部 4 名 小学部 9 名 中学部 8 名 高等部 12 名
蔵書冊数　：	幼稚部　70 冊 小学部　753 冊 中学部　425 冊 高等部　584 冊	床面積　：	幼稚部　16 ㎡ 小学部　16 ㎡ 中学部　10 ㎡ 高等部　16 ㎡	座　席数　：	幼稚部　0 席 小学部　0 席 中学部　0 席 高等部　4 席
年間貸出総数　：　計測不能		児童・生徒の平均貸出冊数　：　計測不能			
年間予算：　0 円					
購読新聞：　0 紙　　購読雑誌：0 誌　　オンラインデータベース：0 件					
インターネット環境：　無線 LAN　、IT 図書室（授業用）		電子図書館　：　未導入			
情報機器・設備　：	事務用 PC　1 台　／　検索用 PC　0 台 インターネット閲覧用 PC　10 台（IT 図書室）				
貸出管理ソフト：　なし（ブラウン式）		書誌データ入力方法　：　Excel 原簿手入力			
学外の他機関との連携協力体制　：　東久留米市立図書館（団体貸出）（株）カーリル（OPAC 作成）					

【令和 6 年度の活動】

・図書の整理、寄贈本受入れ・配架、
・小・中・高でのブラウン式貸出、保護者へのおうち貸出
・小学部資料支援（絵本集会、鎌倉、オノマトペ）、
・中学部の総合学習支援（地域探検、東京探検）
・高等部資料支援（富士山）
・バリアフリー図書展示、紹介
・マルチメディア DAISY 図書整備
・図書館だより発行
・小・中・高図書コーナーの季節の飾り、
・蔵書データ整理、カーリル OPAC 制作・公開



東京学芸大学附属幼稚園小金井園舎

各保育室には、絵本棚を常設しています。子どもたちの発達や季節、行事に合わせ保育に生かしたい絵本や図鑑を適時入れ替えて子どもたちが自由に手に取り見られるようにしています。

降園時などに教師が物語、昔話、自然に関する絵本など毎日読み聞かせを行っています。友達と一緒に新しい絵本と出会ったり、教師や友達と面白さを共有したりする機会としています。また、一つのお話の内容を、幼児が再現できる環境を用意したり、続きをイメージしてお話つくりをしたりしながら、表現活動にも取り入れています。

保護者の活動である図書部による絵本の読み聞かせや公演が行われたり、絵本に親しむ機会が増えるように図書の貸し出しを毎日行ったりして、家庭との連携を図っています。

東京学芸大学附属幼稚園竹早園舎

本園には、絵本の部屋があります。蔵書の中から発達や季節、保育内容に合わせて絵本や図鑑を選び、保育室の本棚に置いたり、担任が毎日読み聞かせを行ったりしています。絵本のお話をもとにごっこ遊びや劇遊びをすることもあります。2024 年度は、4 歳児学年では「バムとケロのおかいもの」のお話のイメージをもとに縄やコマ遊びの導入をしたり、5 歳児学年では「昔ばなし」の絵本をたくさん読み、「さるかに合戦」の劇遊びをしたりしました。また、各学年で絵本の貸出も行っています。子どもたちが自分で好きな絵本を選んで持ち帰り、保護者と一緒に楽しんでいます。

■令和６年度　附属間相互貸借データ一覧

2024 年 12 月末現在

受入校 ＼ 貸出校	世小	世中	附高	金幼	金小	金中	竹小中（含竹幼）	泉小	国際中等	特別支援	附属図書館	運営専門委員会【布絵本】	合計
世小		1	0	0	0	0	0	0	1	0	45	0	47
世中	30		0	0	0	2	2	2	24	0	7	0	67
附高	12	0		0	0	0	7	9	0	0	8	0	36
金幼	0	0	0		0	0	0	0	0	0	0	0	0
金小	7	0	0	0		0	2	0	2	0	0	0	11
金中	0	0	0	0	0		0	0	0	0	0	0	0
竹小（含竹幼）	4	5	0	0	0	0		0	0	0	1	0	10
竹中	6	15	42	0	4	8		12	22	0	15	0	124
泉小	0	0	0	0	0	0	1		21	0	1	0	23
国際中等	0	20	43	0	1	0	10	0		0	39	0	113
特別支援	4	5	4	0	0	0	21	9	8		0	0	51
附属図書館	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		0	0
附属学校課・支援室	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		0
大学催し／研究室	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	4
合計	63	46	89	0	9	10	43	32	78	0	116	0	486

■活動の記録　～会議等～

〈会　議〉

○学校図書館事業委員会

第１回　7 月 30 日(火)　　Teams によるオンライン会議

・今年度の事業内容について・事業委員の先生からの御指導

○学校図書館運営専門委員会

第１回　4 月 18 日(木)　Teams によるオンライン会議

・文部科学省事業について・今年度の取組について（各附属学校園から報告）

・文部科学省事業報告会について

第２回　11 月 12 日(火)　Teams によるオンライン会議

・令和 6 年度文部科学省事業報告会について

第３回　3 月 25 日（火）　Teams によるオンライン会議（予定）

・今年度の反省　来年度の文科省事業について他

○学校図書館運営専門委員会　司書部会　(全 11 回)

（今年度の司書部会は、第 3 回は竹早小・中学校にて、他はオンラインで行った）

第 1 回	4 月 24 日(水)	各校の近況　文科省事業　夏の研修　DB リニューアルについて
第 2 回	5 月 22 日(水)	各校の近況　文科省事業　夏の研修　DB リニューアルについて
第 3 回	6 月 26 日(水)	各校の近況　文科省事業　夏の研修　DB リニューアルについて
第 4 回	9 月 25 日(水)	各校の近況　夏の研修反省　文科省事業　橋本さんを交えて DB リニューアル　「教育者の主体的な学びのためのプラットフォーム」との相互リンク　教大協主催・11 月の学校図書館応援講座「きむらともおさん企画」について　BookReach 事例作成
第 5 回	10 月 23 日(水)	各校の近況　文科省事業　報告会　運営専門委員会　きむらともおさん企画　データベース　文科省図書館アンケートについて
第 6 回	11 月 13 日(水)	各校の近況　文科省事業報告会　文科省アンケート　きむらともおさん企画　データベースについて
第 7 回	12 月 3 日(火)	文科省事業報告会の最終確認
第 8 回	12 月 25 日（水）	文科省事業報告会ふりかえり　実習の手引き改訂　報告集について
第 9 回	1 月 22 日(水)	各校近況　　文科省報告集について　文科省アンケートのまとめ
第 10 回	2 月 26 日(水)	各校近況　報告書・報告集　次年度の司書研修・分担について
第 11 回	3 月 25 日(火)	報告集　次年度の活動について　　（予定）

〈研　修〉

7 月 29 日(月)「BookReach を体験しよう！」

9 月 7 日(土)「「探究」を学びの中心に置く軽井沢風越学園の実践」

〈特別支援学校司書派遣日〉※全 19 回中 6 回分を文科省事業予算で派遣

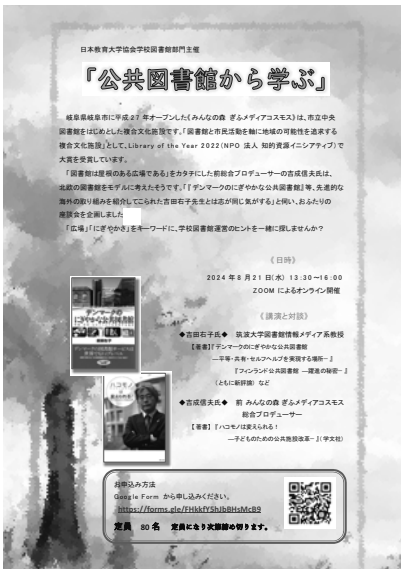
5 月 12 日(日),5 月 20 日(月),6 月 7 日(金),6 月 19 日(水),7 月 1 日(月),7 月 8 日(月),9 月 9 日(月),
9 月 30 日(月),10 月 21 日(月),10 月 28 日(月),11 月 7 日(木),11 月 25 日(月),12 月 2 日(月),12 月 9 日(月),
1 月 20 日(月),2 月 3 日(月),2 月 16 日(日),3 月 3 日(月),3 月 17 日(月)（全 19 回）

＊平成 22 年度より、学校司書を派遣。

■日本教育大学協会学校図書館部門活動報告

日本教育大学協会学校図書館部門代表　東京学芸大学教授　前田　稔
副代表　東京学芸大学附属世田谷中学校司書　村上　恭子

日本教育大学協会学校図書館部門は、学校図書館学と関係する研究者の研究環境の充実、全国の附属学校及び附属学校図書館との連携・協働、教育学全領域の研究者への啓発と相互交流という 3 つの目標を掲げて、2009 年に設立された。組織として、「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」の運営に直接関わっているわけではないが、会員の皆様には、側面から支援をする形で、サイトへの記事の執筆などもお願いしている。2024 年度は、「今月の学校図書館」に、東京大学教育学部附属中等教育学校、東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校の学校図書館についてそれぞれ執筆いただいた。



2024 年 8 月には、附属世田谷中学校図書館部との共催で「公共図書館から学ぶ」と題し、オンライン対談を開催した。講師は、筑波大学教授 吉田右子氏と、前みんなの森 メディアコスモス総合プロデューサー 吉成信夫氏にお願いした。当日、吉田氏には北欧の公共図書館について、吉成氏にはメディアコスモスについてそれぞれ 30 分ほどお話しいただいた後、対談形式で行った。吉成氏の質問は、「なぜ日本の図書館は、静寂を求められるのか？」というもの。これに対し吉田先生は、北欧の公共図書館は公民館的な要素も併せ持っているのに対し、日本は戦後日本独自の公民館が生まれたことで棲み分けが進み、図書館は読書の場として認識されるようになったのが原因という。さらには北欧では、学ぶことに対話や会話は不可欠という認識がある。にぎやかな公共図書館が共通認識を持つにはまだまだ解決すべき問題が多そうだが、まずは学びの場としての学校図書館から変わっていくことが大切だと感じた。オンライン研修には、77 名の方が参加し、熱い感想もいただいた。現在、サイトトップページより動画も見られるようにし、2025 年 1 月現在、525 回再生されている。

11 月には、学校図書館応援講座と銘打って、講師に児童文学作品を未来に語り継ぐための紹介サイト「ハコブネ×ブックス」を主宰するきむらもとお氏、特別ゲストに児童文学作家 八束澄子氏と、ポプラ社編集者 井出香代氏をお迎えした。アーカイブ配信も含め 127 名の申し込みがあり、当日はきむらともおさんの解説によるジャンル別の八束作品の解説もたっぷり。さらには八束氏と井出氏の生の声もお聞きすることができて、とても贅沢な時間を過ごすことができた。参加者からも、このような機会を設けてもらえてとても良かったという感想を多数いただいた。

今後も、学校図書館応援講座のような活動は、引き続き行っていきたい。また、「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」報告集を、まだつながりがない学校司書がいる国立附属学校に送り、学校図書館への理解を深めていただき、学校図書館部門への活動に参加していただけるよう働きかけていきたい。

おわりに

東京学芸大学学校図書館運営専門委員長・附属学校運営参事　古家 眞

「祖母の歩に 合わせ手を引く 田舎道」小６

小学校国語科学習指導要領には「3，4 年生我が国の言語文化に関する事項」として、「易しい文語調の短歌や俳句を音読したり暗唱したりするなどして，言葉の響きやリズムに親しむこと」、「5，6 年生の言語活動例」として「短歌や俳句をつくるなど，感じたことや想像したことを書く活動」が挙げられています。

近年、小、中、高校でも俳句を作る学習活動が盛んに行われているようです。特に小、中学校を訪れると廊下に作品が掲示されている光景を目にします。

「木の上は よくなくセミの すみかだよ」小２

「北海道 リフトをおりたら 空の中」小２

「雨の音 だれかががっそう してるみたい」小３

「満月が にょっきりビルに 見えかくれ」小６

お茶のペットボトルの俳句といえば、多くの方が「ああ、あれね」とお気付きになると思いますが、私が公立小学校長時、これらの作品は「お茶の新俳句大賞」の入選作で、この５点の入賞により「優秀学校賞」を頂きました。

新俳句という名の通り、自由な発想で書ける俳句であり季語も特に入れる必要がないものです。実は、全部の学級で「校長先生の授業」と称して俳句の授業を行い、1,000 人を超える児童がコンクールに応募しました。授業は各学級１回ですが、それを見ていた担任の先生が次の年も授業を継続していたので、しばらく応募は続いていたようです。

俳句は世界一短い(定型)詩と言われます。仕事の合間に窓から外を歩く人の様子を見たり、旅に出て美しい景色に出会ったりすると、言葉が自然に湧き出てくることがあります。文章にまとめるということを考えずに、思い浮かんだ言葉を紡いでいくことで俳句になることもあります。

自分の感じたことを思いのままに表現し、それを文語として残すという行為は、AI の時代を生きていく子どもたちの学習活動としてとても大切なことと思います。

本学附属小学校でも各校の図書館に書棚２，３段分、数十冊の俳句関係の書籍が並び、各学級で俳句を書いている時には歳時記の貸し出しも多くなるようです。6 年担任の先生が学校敷地内で子どもたちの好きな場所の写真とともに短歌や俳句、詩を書かせる活動をし、写真に添えた作品を小さな額縁に入れて校舎のあちこちに展示していた小学校があることを司書の方に教えていただきました。この活動をきっかけにして新たに現代詩や短歌・俳句の書籍を購入したそうです。学校図書館が、子どもたちの表現活動に役立っていることを感じます。

今年度も東京学芸大学学校図書館運営専門委員会が、委託事業として文部科学省読書推進活動を行ってまいりました。昨年 12 月 14 日には全国から多くの方々に御参加いただき、事業報告会を開催致しました。

御支援いただいた文科省、事業委員、本学関係者の皆様の御支援に厚く御礼申し上げます。また、学校現場において司書や司書教諭を支援して頂いている管理職の先生方、教職員の皆様に厚く御礼申し上げます。

令和6年度　学校図書館運営専門委員会関係名簿

所属	学校名	氏　名	職　名	運営専門委員会	附属学校図書館部会	司書部会
附属学校運営部		古家　　眞	附属学校運営部運営参事委員長	○	○	
附属学校課		阿久津　元史	附属学校課長	○		
附属学校	幼稚園小金井園舎 幼稚園竹早園舎	井口　恵美	教諭	○	○	
		町田　理恵	教諭	○	○	
	世田谷小学校	梅田　　翼	司書教諭	○	○	
		河野　広和	司書教諭	○	○	
		金澤　磨樹子	司書	○	○	○
	小金井小学校	西岡　里奈	司書教諭	○	○	
		松岡　みどり	司書	○	○	○
	大泉小学校	山下　美香	司書教諭	○	○	
		富澤　佳恵子	司書	○	○	○
	竹早小学校	高須　みどり	司書教諭	○	○	
		宮﨑　伊豆美	司書	○	○	○
	世田谷中学校	阿部　由美	司書教諭	○	○	
		渡邉　　裕	教諭	○	○	
		村上　恭子	司書	○	○	○
	小金井中学校	数井　千春	司書教諭	○	○	
		長友　春陽	司書	○	○	○
	竹早中学校	荻野　　聡	司書教諭	○	○	
		中村　誠子	司書	○	○	○
	高等学校	桒原　智美	司書教諭	○	○	
		明田川　綾乃	司書教諭	○	○	
		岡田　和美	司書	○	○	○
	国際中等教育学校	野島　淳司	司書教諭	○	○	
		渡邊　有理子	司書	○	○	○
	特別支援学校	長谷川靖子	司書教諭	○	○	
		堀田　　椋	教諭	○	○	
		宮﨑　伊豆美	司書（竹小と兼務）	○		
学術情報課 （大学図書館）		山崎　裕子	学術情報課長	○		
		武田　邦宏	学術情報課副課長（総務担当）	○		
		瀬川　結美	学術情報課副課長（学術情報担当）	○		
		高橋　正喜	学術企画係長	○		

附属学校課	須貝　英美子	副課長	
	金子　賢治	附属学校第一係長	

事業委員会・研究協力者一覧

〈事業委員会〉

氏名	所属・職名	備考
前田 稔	東京学芸大学　総合教育科学系　教授	図書館学・学校図書館
鎌田 和宏	帝京大学　教育学部　初等教育学科　教授	教育方法・情報リテラシー
野口 武悟	専修大学　文学部人文・ジャーナリズム学科　教授	図書館史・学校図書館
長谷川 優子	元埼玉県立久喜図書館　副館長　東京学芸大学非常勤講師	レファレンス・情報リテラシー
今井 福司	白百合女子大学 基礎教育センター 准教授	学校図書・図書館史
高橋 奈菜子	新潟大学学術情報部長	図書館情報学

〈研究協力者〉

＊　浅石 卓真　　南山大学准教授
＊　井谷 由紀　　元東京学芸大学附属小金井中学校 学校司書
＊　小野 永貴　　筑波大学図書館情報メディア系助教
＊　きむらともお　　ハコブネ×ブックス主宰
＊　澤田 英輔　　軽井沢風越学園　国語科教諭
＊　大作 光子　　軽井沢風越学園　司書教諭
＊　中山 美由紀　　前東京学芸大学附属小金井小学校 学校司書　立教大学兼任講師
＊　橋本 健志　　合資会社 風夢
＊　宮田 玲　　東京大学講師
＊　ムラタエイコ　　デザイン担当
＊　矢田 竣太郎　　筑波大学准教授
＊　吉田 右子　　筑波大学教授
＊　吉成 伸夫　　前みんなの森メディアコスモス総合プロデューサー

（敬称略　五十音順）

令和６年度　文部科学省事業
読書推進活動事業

みんなで使おう！学校図書館　Vol.16
「先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース」報告集

編　集　東京学芸大学　学校図書館運営専門委員会
発行日　令和７年３月
発行者　古家 眞
発　行　東京学芸大学　附属学校運営部
〒184-8501　東京都小金井市貫井北町 4-1-1

『みんなで使おう！学校図書館』Vol.1～15 は、東京学芸大学附属図書館 HP リポジトリで読むことができます。

1学期　附属国際中等教育学校
高3DP 文学「文学は戦争を抑止するのか？」

東京学芸大学附属図書館 2階
附属学校の授業紹介掲示コーナー

2学期　附属高等学校
高2 家庭科＋公民「金融教育」

◀先生のための授業に役立つ学校図書館活用データベース

大学図書館と附属学校図書館の蔵書検索サイト『GAKUMOPAC』▶